

令和五年度

青少年健全育成作文

優秀作品集

墨田区

墨田区教育委員会

ま え が き

青少年が地域社会の一員として多くの人と交流を深め、互いに支え合える社会環境を作ることは、青少年の健全育成と非行防止の推進における重要課題であり、こうした社会環境を作るためには、急速に変化している青少年の意識や考え方、取り巻く環境を大人が理解し、互いに歩み寄ることが必要です。

青少年健全育成作文コンクールは、大人が青少年の意識や考え方について理解を深めることを目的として、毎年行っているもので、「家庭・学校・地域などの生活の中で『人と人とのふれあい』について感じていることや考えていること」をテーマに、作文を募集しました。応募いただいた作文は、「人と人とのふれあい」の中で、日頃感じていること、考えていることなどが率直に表現されており、心豊かな感性に満ち溢れた、素晴らしい作品でした。

今年度のコンクールにも、小・中学校あわせて【5432編】と多くの応募をいただき、審査を経て【171名】が入賞となりました。ここに入賞作品のうち最優秀賞、優秀賞の42編の作品をまとめましたので、青少年健全育成活動を推進する方々の青少年理解の一助としてご活用いただければ幸いです。

終わりに、本コンクールに応募していただいた方々をはじめ、作品の取りまとめや、審査にご協力をいただいた小・中学校の教員及び関係団体代表者の方々に厚くお礼申し上げます。

令和六年三月

墨 田 区

墨田区教育委員会

目次

最優秀賞

○小学校の部

やさしいきもちでいっぱいのおせかいに……………	押上小学校	一年	松本悠生……………	1
ウクライナレストラン……………	両国小学校	二年	仲西樹希……………	2
大切な宝ばこ……………	第三吾嬬小学校	三年	藤村穂花……………	3
じいじとつないだ手……………	緑小学校	四年	五百藏優愛……………	4
ぼくの大切な髪……………	第四吾嬬小学校	五年	鵜澤共……………	5
登下校を豊かに……………	柳島小学校	六年	我部歩梨……………	6

○中学校の部

繋がる心遣い……………	寺島中学校	一年	錦織侑里奈……………	8
児童館で教わった大切な事……………	本所中学校	二年	北山愛和……………	9

優秀賞

○小学校一年生の部

かわいいゆつきー……………	外手小学校	一年	北川幸生……………	13
わたしとまま……………	第三吾嬬小学校	一年	櫻井笑見花……………	14
ほいくえんのボランティアでまなんだこと……………	第四吾嬬小学校	一年	森泉こはる……………	15
ひいおばあちゃんからつながる				
一てら小がっこう……………	第一寺島小学校	一年	河本鈴奈……………	16

○小学校二年生の部

ともだちのやさしさ……………	錦糸小学校	二年	新津玲奈……………	18
あいさつはともだちのもと……………	第二寺島小学校	二年	鳥村亮平……………	19
バイバイひいおじいちゃん……………	中川小学校	二年	池永康誠……………	20
すずののだいぼうけん……………	押上小学校	二年	福田鈴乃……………	20

○小学校三年生の部

私のふしぎな気持ち……………	中和小学校	三年	足立 栞理……………	22
いろいろな意見から学ぶ……………	業平小学校	三年	岡本 瑠美……………	23
ぼくとおおじじ……………	横川小学校	三年	皆川 泰輝……………	24
人と人とのふれあい……………	第二寺島小学校	三年	ゾウ 偉来……………	25

○小学校四年生の部

すみだっ子のゆめ……………	中和小学校	四年	松田 和奏……………	26
みんなへのおん返し……………	柳島小学校	四年	小沢 結理……………	27
近所のおばあちゃん……………	第三吾孀小学校	四年	柴田 一花……………	28
「私にもできるボランティア活動って?」……………	東吾孀小学校	四年	池川 彩未……………	29

○小学校五年生の部

マスクを外した喜び……………	緑小学校	五年	加藤 礼菜……………	31
Thank you for everything!……………	両国小学校	五年	初山 香都……………	32
笑顔の花を咲かせよう……………	菊川小学校	五年	鳥谷部 絢央……………	33
大切な二人へ……………	立花吾孀の森小学校	五年	寺沢 妃愛……………	34

○小学校六年生の部

夏休みで学んだこと	緑小学校	六年	今村香介	36
心の支え	横川小学校	六年	浅野心	37
おばあちゃんの優しさ	第四吾孀小学校	六年	矢花正騎	38
あいさつ	八広小学校	六年	増田昊輝	39

○中学校一年生の部

見て見ぬふり	吾孀第二中学校	一年	西垣実杜	41
「正しいから仕方がない」	文花中学校	一年	浪川優稀人	42
二〇二三夏の決意	吾孀立花中学校	一年	藤本美緒	43

○中学校二年生の部

幸せ	両国中学校	二年	島田香里奈	45
怪我から学んだ人々の温かさ	豎川中学校	二年	飯島ソウカディージャ	46
祖母への花束	寺島中学校	二年	内海克博	47

○中学校三年生の部

出会ってくれてありがとう	本所中学校	三年	岸上 茉奈	49
支えてもらっていること	寺島中学校	三年	松村 柚希	50
「僕の日常」	桜堤中学校	三年	結城 大雅	51

○佳作一覧

53

○講評

墨田区立吾嬬第二中学校長 駒田 るみ子

58

○審査員一覧

59

最
優
秀
賞

やさしいきもちでいっぱいのせかいに

押上小学校 一年 松本 悠生

ぼくのいとこのこうちゃんはきんジストロフィーというびょうきです。うまれてすぐにびょうきがわかりました。げんざい、ちりょうやくはかいはずされていません。

こうちゃんはとてもがんばりやさんです。うんどうかいのときのことです。みんなとおなじようにしたくてがんばってしまい、そのよるはあしがいたくてなっていました。こうちゃんがんばっていいないのでありません。びょうきになりたくてなっているのではありません。

ことしのなつ、しょうにゆうどうをみにいったときのことです。ぼくたちがおもっていたよりもかいだんがたくさんありました。こうちゃんはもうあるけません。まだまだでぐちまでたくさんあるのとしんぱいしていたら、ぼくのちゆうがくせいのおにいちゃんのそうとがこうちゃんをひよいとだっこしてあるきだしました。みんなプールにいったときは、みんなで

いっしょにおおきなプールでおよげるようにママがうきわをこ
うちゃんのからだにつけビートばんをこうちゃんにもたせて
ひっぱってあげていました。

こうちゃんといっしょにどこかいくとき、こうちゃんのママ
のひーちゃんは、

「もしかしてこれがみんなでいくさいごになるかもね。」

といいます。それはこうちゃんのできないことがだんだんふえ
ていつているからです。いままでできていたことができなく
なってしまうことでこうちゃんのせかいがせまくなってしま
うのではないかとしんぱいになりました。ママはぼくによく、
「できないことはまわりのできるひとがやればいいんだよ。」
といいます。

かんがえてみたらぼくにもたくさんできないことがあります。
でもこまったときにはいつもまわりのひとがたすけてくれてい
ます。

たとえば、まいにちあさとうこうのときにきにはみまもつて
くれているおじさんがいます。ママのかえりがおそくておなか
をすかせていると、となりのおじさんがごはんをもってきてく

れます。

こうちゃんのせかいがせまくなってしまふことがしんぱい
だつたけれど、きつとだいじょうぶ。これからあるけなくなつ
ても、ひーちゃんやママやそうとがあたりまえのようにしてい
ることのように、ひとつひとつがちいさいことでもそういうこ
とがあつまることで、こうちゃんのせかいもひろがつていくん
だとおもいました。

こうちゃんのまわりのせかいはぼくのまわりのせかいもたく
さんのやさしさであふれていることをおしえてくれました。ぼ
くもやさしいきもちでいっぱいのせかいにいきっています。
こうちゃんありがとう。これからもよろしくね。

ウクライナレストラン

両国小学校 二年 仲西 樹希

八月一日、お母さんと西新ばしにあるウクライナレストラン
に行きました。名前は、「スマチノーゴ」と言います。ウクラ
イナ語で、「おいしくめしあがれ」と言ういみです。

ぼくは、ウクライナ風ロールキャベツをたのみました。あじ
は、トマトソースベースで牛肉と玉ねぎと人じんがみじん切り

になつてキャベツにくるまれていました。いつも食べている
ロールキャベツみたいでした。セットについてた黒パンがおい
しかったです。

はたらいっている人たちは、ウクライナ人のなんみんなの人たち
です。二十だいくらいの人と五十だいの女せいの人がいました。
やさしそうなかんじがしました。

このレストランは、わたしたちが食べることによってウクラ
イナへしえんができます。また、ここではたらく人たちのお
きゅうりようになります。

はたらいっている人たちは、あまり日本語を話せません。しか
し、えい語を話せる人もいます。みなさんは、日本せいふが用
いた家にすんでそこからお店に来ています。

ぼくは、このレストランがとてもいいなと思いました。ウク
ライナの人たちをたすけられてとてもいいなと思います。

ロシアとウクライナのせんそうが早くおわることをねがいま
す。このせんそうでぼくは、何もできません。せんそうに行つ
ていつしよにたたかうこともできません。でも、ウクライナレ
ストランで食べることによつて、ウクライナの人たちをたすけ
ることができます。

みなさんもぜひ行ってみて下さい。とてもおいしいですよ。

大切な宝ばこ

第三吾孀小学校 三年 藤村 穂花

わたしには、とても大せつな大せつな宝ばこがあります。それは、父とふれ合えるやさしさがたくさん入った心の宝ばこです。わたしの父は、わたしが生まれて十九日後になくなりました。父といっしょにすごしたことはおぼえていません。だけど、母やまわりの人たちが父のことをたくさん話してくれます。

わたしと父は、おたん生日が同じ日です。赤ちゃんのわたしを、父がりょう手でだっこしながらやさしい声で、

「小さいなあ、かわいいなあ。」

と、ニコッとわらって言うてくれたことは母から聞きました。とてもうれしかったです。父は、ギターがすきで母のおなかの中にいたわたしにギターをひいてくれたそうです。そして、動物が大すきで犬をかっていたこと、いつもわらっていて、だれとでもなかよくできる人だったと聞きました。話を聞いてるとわたしの心の中にある宝ばこがキラキラとかがやいて、父の思い出が入っていきます。まるで父とおしゃべりをしているようです。楽しくて、しあわせな気もちになります。

父が生きていたら、いっしょにやりたかったこともあります。

一つ目は、手をつないで歩くことです。きつと大きな手で温かいんだらうなと思います。二つ目は、いっしょにレゴやあやとりであそぶことです。わたしがふざけてあそんでいるときに、父もふざけて、

「それはだめでしょう。」

と言いながら、わらいあつてみたかったです。三つ目は、わたしは歌をならっているので、父のギターに合わせて歌をうたうことです。お家で小さなコンサートをひらいていたかもしれない。そして、おたん生日がいっしょなので、プレゼントこうかんをしていたのかなと思いました。

父とやりたかったことをそうぞうするのは、かなしくなるのではなくて、どんな風に父とふれ合つてあそんでいたのかなと思うと心がわくわくして楽しい気もちになります。ほいくえんの先生が、

「お父さんはいつも見守つてくれているよ。」

と話してくれたことがあります。元気がでてうれしかったことを今でもおぼえています。生きていなくても心の中にある「大せつな宝ばこ」をひらけば、いつでもつうじ合つてふれ合うことができます。宝ばこの中は、父のやさしさや思い出があつて、わたしの力になってくれます。元氣とえ顔をくれます。

これからも「心の宝ばこ」を大せつにしていきたいと思えます。そして、わたしと同じような人に出会ったら、心の中もえ顔になれるように「大せつな宝ばこ」のお手つだいができたらいいなと思いました。

じいじとつないだ手

緑小学校 四年 五百藏 優愛

私には、高知に住んでいるじいじがいます。じいじのことが、私は大好きです。

じいじはいつもニコニコしていて、とても優しいです。私が高知にいる時は仕事が終わるとすぐに帰ってきてくれて、たくさん遊んでくれます。じいじの好きなしよぎのこまを使って、金ころがしやはさみしよぎをやったことがとても楽しくて覚えていきます。

休みの日には、じいじとばあば、ママとおじちゃんと一緒にお庭でバーベキューや流しそうめんをしました。みんなでお庭で食べるお肉やおそうめんは、とてもおいしくて楽しかったです。

他にも、じいじは畑でいろいろな野菜を作っていて、その

しゅうかくと一緒にしました。じゃがいもや玉ねぎ、えだ豆をしゅうかくして、その野菜で料理を作って食べました。じいじの野菜はいつも食べている野菜より、何倍もおいしく感じました。

そんなじいじがきょ年病気になるしました。病気がわかった時、とても悲しかったです。じいじともう遊べないかもしれないと思うと、つらい気持ちでいっぱいになりました。けれど、じいじはあきらめませんでした。弱音もはず、つらい治りようを一生けんめいがんばりました。退院もできて、バーベキューや流しそうめんもまたできました。旅行にも五回も行きました。じいじとまたいっぱい遊べて、たくさん一緒にすごせて、家族の思い出がさらにふえたことが私は本当にうれしかったです。

じいじの体調がわるくなり、また入院になりました。もう家には帰れないとじいじはわかっていました。病院に着いて入院の手続きが終わるのを待つ間、じいじは私の手を優しくぎゅーつと何度もにぎりました。その時のじいじの表情を私はわすれません。

「ゆめ、がんばってね。」

そう言っているようでした。じいじの手のぬくもりを今でもはっきりと覚えています。そこに言葉はなくても、つないだ手

から感じる事が出来たじいじの思いを私はこの先もずっと大切にしたいです。

人とのつながり、思いを伝えることは、言葉だけではないとじいじが教えてくれました。つないだ手から伝わるぬくもりは、私に優しさと元氣、がんばるゆう気をあたえてくれました。私もじいじのように人とのつながりを大切にして、言葉以外でも人に思いを伝えていきたいです。

ぼくの大切な髪

第四吾孀小学校 五年 鵜澤 共

ぼくは、男の子ですが、髪をのばしています。のばし始めた理由は、髪を女の人のようにのばしてみたいと思ったからです。このことをお母さんに話したときにヘアドネーションのことを知りました。

ヘアドネーションとは、病気で髪を失ってしまった子どもたちにはぐくたちの髪を使って医りよう用ウィッグを作り寄付することです。このことを知ったときに、今まではとこ屋に行つて髪を切ると、切つた髪はゴミになつてしまうのに、のばすだけでだれかの助けになるんだと思いました。

髪をのばし始めてから気が付いたことがあります。自分や関わっている周りの人の当たり前を変化させられるということですよ。

ぼくは、ヘアドネーションを知る前は男の人は髪が短くて、女の人が長いのが当たり前だと思っていました。しかし、ヘアドネーションを知つてからは、男の人も髪は長くても良いし、女の人も髪が短くても良いと思えるようになりました。周りの人は、初めて髪がのびてきたときに、「おかつぱ」「五才児」「女の子みたい」とぼくにとつていやなことを言いました。しかし、時間が経つにつれて何も言われなくなり、「髪のびたね」「よくがんばっているね」など前向きな言葉をかけてもらえるようになりました。

このことから、めずらしく慣れていない物事に対しては、いやな感情をもつて行動をしてしまうのだと思いました。また、慣れてきて当たり前になったり、知識として身に付いたりすると前向きな感情をもち受け入れられるのだと思いました。

周りの人たちは、ヘアドネーションについて知ることやヘアドネーションをしている人のそんざいを知り、身近に関わることで、受け入れられるようになると思います。

このことを知ってもらえれば、人種差別やしょうがい者差別

を減らせるのではないかと思いました。みんなが勝手にそうだろうと思っっている当たり前が差別につながっていて、その当たり前に思っていることを日常生活の中で減らしていけると思いました。

ぼくは、男の子が髪をのばすことでも大切なことに気が付きました。一つ目は、髪をのばすことで病気によって髪を失ってしまった子どもの助けになり、社会こうけんにもなることです。二つ目は、めずらしかったり分からなかったりする物事に対して人は差別的な行動をとってしまうことです。反対に慣れていたり、知っていたりする物事に対して人は前向きな行動をとることができると気が付きました。

ぼくの髪は、病気で髪を失ってしまった子どもたちの助けになり、差別を無くす可能性を持っている大切な髪です。

登下校を豊かに

柳島小学校 六年 我部 歩梨

二〇二二年三月。私は学区外へ引っ越しをした。転校はしなかったが、今までよりも学校への道のりは遠くなり、毎日の登下校が大変になった。夏はとても暑いし、冬は寒い。雨や風が

強い日は、着いたころにはびしょびしょになっているときだつてある。大変な登下校。学校へ行く気も失せてくる。しかしそんな登下校の中で、家の近くにある横断歩道に必ずいつもいてくれる、交通安全の方の存在が大きかった。その存在は、私の中でいつしか安全を守るだけではなくなった。

その方は、家の近くの横断歩道にいらっしゃる。どんな時でも、笑顔で声をかけてくれる。本当は違う小学校の担当の方なのに、そのような素振り一つ見せず。どんなに暑くても、どんなに寒くても、どんなに雨や風が強い日でも、必ずそこにいる。その存在は、当たり前のようで当たり前ではない。そのことに感謝しなくてはいけないのだ。私が横断歩道にいる時はほんの一瞬だし、そこで止まらずに行く時だつてある。それでも「おはよう」「いってらっしゃい」その何気ない言葉が私の中ではとても大きかった。この言葉が一日の始まりを表しているようだった。

でも、私が学校を休む日もある。私が学校を休んだ日、一日の始まりの声は聞けず、ゆううつな日だった。そんな心を明るくしてくれたのも、また、いつものあの方だったのだ。次の日、いつもと同じ「おはよう」の声。一日の始まりを表す、あの一言。それだけでも心は充分に晴れただろう。でも、それだけで

はなかったのだ。「昨日はどうしたの」「大丈夫だった」その声
が聞こえた。いつもあいさつをしてそこを通り過ぎていくだけ
の私のことを、覚えてくれて、気にしてくれて、心配してくれ
た。そう考えた瞬間、嬉しい、ありがたいという感情が込み上
げてきた。さらに、気をつかって話しかけるタイミングをみた
り、必要以上聞かないようにもしてくださっていたのだ。その
心づかいに心を打たれた。その日の「いってきます」は、いつ
にも増して大きかった。

初めて声をかけられた時、私は不安でいっばいの登校だった。
近くにランドセルを背負った子どももいなければ、正しい道か
も分からない。そんな緊張を一言で解いてくれたあの言葉。そ
の時はまだちゃんとしたあいさつはできなかったかもしれない。
それでも精一杯の「おはようございます」だった。その日から、
私は絶対にあいさつを欠かしていない。私を助けてくれたその
あいさつに、絶対に応えたいその一心で。

毎日あいさつを交わし、「いってきます」と言って横断歩道
を渡る。それはただ横断歩道を渡るだけではない。私は今まで
交通安全の方をありがたい存在だと感じていた。しかし、その
存在は、私の登下校を豊かにしてくれる必要不可欠な存在でも
あるのだ。



繋がる心遣い

寺島中学校 一年 錦織 侑里奈

私達が普段生活する上で、清掃は誰もが経験したことがあると思う。皆さんは、清掃の仕事に対してどう思っているのだろうか。

「あまり目立たない」、「考えたことすらない」という人も多いのではないだろうか。しかし、私は人と接するときに必要なことを学ぶことができたと思っている。

私は今年の夏休みに家族旅行で長野県に行った。その滞在先のホテルにチェックインし、部屋に入ったとき、信じられないほど綺麗だと思った。窓や壁、床などに汚れや埃が一つもなく、まるで新品のようだった。また、ベッドのシーツ、タオルもシワがなく端までしっかりと揃えられていて、丁寧さがよく伝わった。そして、廊下やトイレなどの共用スペースも、とても清潔に保たれていた。それらは、全てホテルの清掃スタッフの方々のおかげである。しかし、清掃スタッフの方々は注目され

ることが少ない気がする。部屋や共用スペースなどは、利用客がチェックアウトした後に清掃を行うので、利用客に会わないからだ。そのため、多くの人が清掃を行う人に対して無関心であることが多いと思う。もちろん、無関心であることが決して悪いという訳ではない。しかし、私は関心や興味を持つことによつて、人と心で繋がる瞬間ができると考える。

私は、清掃の仕事には、日本の文化の「おもてなし」が関係していると感じた。「おもてなし」とは、お客様や大切な人に対する心遣いで、対価を求めず、相手のことを考えて行動するという意味だ。清掃の仕事は、実際の相手の反応を見ることはできないが、どうすれば相手に快適に過ごしてもらえるかをよく考える心を持つことで、相手の想像を超えた「おもてなし」ができ、相手側はその「おもてなし」を心で感じ取る。このように、「おもてなし」とは直接でなくても心で繋がる瞬間ができるものだと考える。もちろん相手が「おもてなし」を心で感じ取れなければ、心の繋がる瞬間はない。だから、清掃を行う側だけでなく、「おもてなし」を受ける側も関心や興味を持つことが大切だと思う。また、日本の「おもてなし」は、海外の

人にとっても驚かれることが多い。なぜなら、海外の「おもてなし」と言われる「ホスピタリティ」は、自分が受けたサービスに対して「チップ」という対価を支払うことが多いからだ。

私は、清掃の仕事の素晴らしさに関心や興味を持ったことをきっかけに、日本の文化の「おもてなし」を改めて学ぶことができた。今後は、何事にも当たり前だと思わず、毎日に感謝しながら生活していきたい。また、「おもてなし」の心のように、相手に対する心遣いを大切にして人と接していきたい。

児童館で教わった大切な事

本所中学校 二年 北山 愛和

「社会は人々が支え合い成り立っている」私はこの事を職場体験で改めて感じました。

私は初め、体験先が児童館だと決まった時あまり気が進みませんでした。正直、大変そうだな。私に小さい子の相手ができるのかな。とマイナスなことばかり考えていました。なぜなら私には小さい妹や弟がいるわけでもなく、小さい子供と接した経験がほとんどないからです。私がこの事を母に相談してみると母は「良かったじゃない」と言いました。私は意味が理解で

きず詳しく話を聞きました。私は幼い頃児童館に通っていて、そこで初めて同年齢の子とふれあい、友達と遊んだり歌を歌ったりすることの楽しさを学びました。また、母は育児の苦労や悩みを話せる場として、児童館は当時の私たちにとってなくてはならない存在でした。そんな児童館に少しでも恩返しできる機会だと母は話しました。久しぶりに児童館に通っていた幼い頃の話聞いて、私は周りの人に支えられてここまで成長してこれたのだなと思いました。小さい頃あれ程遊んだりお世話をしてもらうなど、たくさんものを周りから与えてもらったのだから、次は大きくなった私が小さな子供達に色々なものを与える番だと心に決めました。

職場体験当日、乳幼児から小学生までたくさんの子供達とふれあいました。やはり小さい子はまだ言葉が話せなかったり、うまく自分の感情を表現できずコミュニケーションを取る事はとても大変でした。ですが、会話ができなくても、とにかくたくさん褒めてあげたり、話している事を笑顔でゆっくり聞いてあげるなどの工夫をすると、小さい子も自然と笑顔になり一緒に遊んでくれました。

苦手だと思っていた児童館の仕事でしたが、これをきっかけに自分の幼少期の話を聞いたり、児童館の仕事や子供との接し

方を知る事ができました。私がそうだったように、初めて母以外の人とふれあい、絵本や音楽に出会う場所・赤ちゃんのいるお母さんが、他のお母さんや児童館の職員さんとお話して育児の不安を和らげられる場所として、児童館のある意義をより多くの人に知ってほしいです。そして児童館のような、人々が自由にふれあい、心の拠り所となる場を大切にしたいです。

今回児童館での体験を通して、社会は人と人が支え合い成り立っている事を身にしみて感じました。誰しも他人の助けなしでは生活できません。小さい子供はもちろん、大人もです。この社会は人と人が支え合い、助け合うことで成り立っています。この事を当たり前と感じ、あまり重要視せずに生活してしまっている今こそ、日頃から周りの人への感謝を忘れず、恩返しのできる気持ちで自分ができる手助けは積極的にやりたいです。そのよきな行動や心掛けの積み重ねがもつと互いを思いやり、支え合う、明るい社会にする事に繋がると思います。





優
秀
賞

小学校 一年生の部

かわいいゆつきー

外手小学校 一年 北川 幸生

ぼくには、いもうとがいます。いま、3さいです。なまえはゆきで「ゆつきー」とよんでいます。ゆつきーはピンクがすきです。いつもピンクのコップをもちあるいています。

ゆつきーは、ぼくが4さいのときにうまれました。うまれたとき、とてもうれしかったです。てがちいさくてかわいいなおもいました。ミルクをあげたり、だっこをしてあげたりしました。ゆつきーのおせわをがんばりすぎて、ぼくはかぜをひいてしまいました。

ゆつきーが1さいになったとき、ぼくといつしよにほいくえんにいくことになりました。まいあさ、てをつないでほいくえんへいききました。ほいくえんでは、ゆつきーがないと、ぼくはせんせいによばれて、なぐさめにいききました。おひるねのとき、ゆつきーがなかなかおきないときは、ぼくがおこしにいつてあげました。

ことしの7がつのことです。ゆつきーがたかいねつをだして、つらそうにしていました。ぼくはとなりについて、ほんをよんであげました。「はやくなおってね。」とおもってよみました。くすりをのむとき、いやがるので、

「おいしいよ。」

と、こえをかけてあげました。そのあと、ぼくもねつをだしてしまいました。ぼくがねていると、こんどはゆつきーがしんばいして、ちかくにきてくれました。やさしいなおもつてうれしくなりました。

ぼくは、ゆつきーのおにいちゃんとして、がんばっていきます。かぜのときにかんびょうしたり、ぼくのとくいなプールやダンスをおしえてあげたりしたいです。そして、これからもゆつきーとなかよくしていききたいです。

わたしとママ

第二吾婦小学校 一年 櫻井 笑見花

「おはよう。」

ママのいちにちは、わたしをこちよこちよしながらおこすところからはじまります。わたしは、かぞくでいちばんねぼうをします。わたしには、めざましどけいがなくてもきこえません。ゆめのなかからでてこれません。だから、まいにちママのこちよこちよです。

わたしは、ママがだいすきです。

ママは、おりょうりをおしえてくれます。こんどは、オムライスをつくりたいです。

ママは、がんばったときごほうびをくれます。だからいつも、ごはんをいっぱいいただきます。

ママは、いつもがんばっています。おしごと、おそうじ、ストレッチまでおしえてくれます。

ママは、おこるところこわいです。ぜんぶわたしのためだとわかっていても、ものすごくいやなかおをしてしまいます。そうすると、ママはおになります。だけど、ごめんなさいをいうのはむずかしいです。なんですか。

ねえママ、こっちみて。

ねえママ、いつかだけ。

ねえママ、おねがい。

ねえママ、だっこして。

ねえママ、だいすき。

ほんとうはね、ありがとうをつたえたいよ。

わたしのなまえのことをママにききました。

4がつ18日にうまれました。さくらはなをみあげながらにこにことわらっているイメージで、「笑見花」とつけたみたいです。

「ずっとえみちゃんかわらっぺいられるように、がんばるよ。おはなのようにかわいくいてね。かなしいときや、こまったときは、ママがおみずをあげるからね。」

「おみず？なんで？わたしはおはなじゃないよ。」
と、おおわらいました。

おっちよこちよいのママといるとたのしいです。

また、かぞくでおでかけしたいです。そのとき、ママとてをつなぐのは、わたしです。

ほいくえんのボランテアでまなんだこと

第四吾孀小学校 一年 森泉 一はる

わたしは、なつやすみに、おかあさんのほいくえんにボランテアにいきました。

ほいくえんには、0さいから、しょうがつころにはいるまえまでのおともだちがいます。

さいしよに1さいクラスにいきました。「あそんであそんで。」と、くるとおもったけれど、ぜんぜんきてくれなくて、えほんをよんでもとちゅうでいなくなっちゃいました。

かえりみちに、おかあさんに、

「1さいクラスはひとみしりをするんだよ。」

といわれました。

「1さいクラスのおともだちがすきなことをしてあげると、なかよくできるよ。」

と、おしえてもらいました。

べつのひ、1さいクラスのおともだちがすきなジャンボリミッキーをおどってあげたら、みんなまねしてくれました。えほんもせんせいのまねをして、たのしくおおきなこえでよんだら、さいごまでみてくれました。

おかあさんにちゅういされたことがあります。「ほいくえんにちいさいものはもっていっちゃだめだよ。」と、いわれていたのに、ズボンにチェーンをいれていて、よるチェーンがないことに気づきました。みつかったけれど、あかちゃんがたべていたらとおもうと、とてもこわかったです。おかあさんに、

「ボランテアはあそびじゃないんだよ。」

といわれ、つぎからはあかちゃんのあるぜんをまもうとおもいました。

つぎに、3、4、5さいのクラスにいきました。そのクラスではけんかがおおかったです。おはなしゾーンがあつて、そこでけんかのことをはなすことができます。けんかをしているおともだちがいたので、わたしがはいつて、きもちやいやなことをきいて、なかなかおりできました。

ほいくえんにはプールがありました。がっこうのプールはふかくてこわいからおよげないけれど、ほいくえんのプールではおよげました。これからは、がっこうのプールでもおよぐのにちようせんします。

ほいくえんでは、おへやであそぶのかプールにはいるのか、ふかいプールかあさいプールかがえらべます。ごはんのりょうもきめられます。どうしてかというと、じぶんでかんがえてこ

うどうできるおとなになれるように、こどものときからえらぶことをしているのだそうです。

わたしがボランテアでてにいたたちからは、せんせいやおともだちにじぶんからはなせるようになったことです。

ボランテアは、たのしかったです。わたしも、たくさんひとのまえで、じしんをもっておおきなこえで、おはなしできるひとになりたいです。

ひいおばあちゃんからつながる

一てら小がつこう

第一寺島小学校 一年 河本 鈴奈

「すずは、ばあばとおんなじ小がつこうにいくのよね。」

93さいのひいおばあちゃんは、わたしが一てら小がつこうにゆうがくすることをとてもたのしみにしていました。にゆうがくしきの日、わたしはいそいでひいおばあちゃんのいえにいききました。

ひいおばあちゃんは、わたしのランドセルすがたをみてないていました。そして、むかしの一てら小がつこうのことをはなしてくれました。

「むかしはおとこの子とおんなの子はべつべつのクラスだったのよ。」

「ええ、じゃ、いつしよにあそべなかつたの？」

「きゆうしよくはおいしかった？」

「きゆうしよくなんてなかつたから、みんなおべんとうをもつていったのよ。」

ひいおばあちゃんは、むかしのことをよくおぼえていて、たくさんはなしをしてくれました。

おばあちゃんもおかあさんも、一てら小がつこうにいつたので、はなしにくわりました。おばあちゃんときは、こうていにみんなであつまって、ひこうきがとうきょうオリンピックのマークをつくるのをみたそうです。おまつりの日はじゅぎょうがやくおわってうれしかったそうです。おかあさんのときにあつたうんどうかいのおうえんかや大玉おくりは、いまもあつてなつかしいといっていました。

みんなのはなしをきいていて、わたしはたのしくなりました。わらいながらはなす、小がつこうのはなしは、たのしいはなしばかりです。ひいおばあちゃんも、おばあちゃんも、おかあさんも、きつとにこにこして小がつこうにかよつたんだとおもいました。

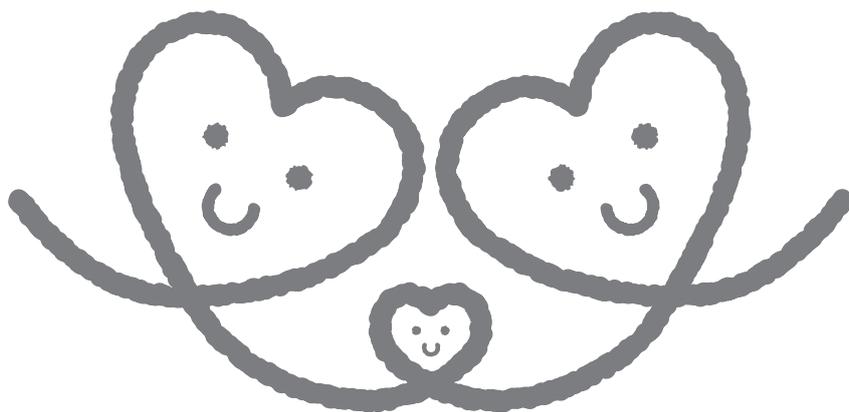
「ばあばは、すずにむかしのことをはなすためにながいきしたんだね。」

と、ひいおばあちゃんがいました。おかあさんが

「ばあばからすずちゃんまで、4だいにつたえてくつてすごいことだね。みんながはなしてくれたことわすれないでね。」
といました。

いまは、まだ6さいのわたしですが、しょうらい大人になって、たのしいことを子どもたちにたくさんはなしてあげたいとおもいます。そうしたら、ひいおばあちゃんからずつとつながるとおもうからです。

わたしは、まい日えがおで小がつこうにいったのしいことをたくさんしなきゃとおもいました。



小学校 二年生の部

ともだちのやさしさ

錦糸小学校 二年 新津 玲奈

わたしは、二年生になる前の春休みに、山口けんからすみだくにひっこしてきました。

ひっこしてきたからは、いえのまわりや学校までの通学ろに何があるのか、かぞくといっしょにさんぽをしながらおぼえることからはじめました。

なれないばしょ、ともだちもないじょうたいで町の中をさんぽするのは、とてもこわくてふあんな気もちでいっぱいでした。

なぜなら、前にすんでいた山口けんは、けんないでもないなかのほうだったので、きんじよの人や、おなじちくにすんでいる人は、ほとんど見たことのある人ばかりで、あえばおたがいにえがおであいさつをするのがあたり前だったからです。

じっさいにきんし町の中をさんぽしていても、とうきょうはとかいなので、だれかとすれちがってもえがおであいさつをす

る、ということはありませんでした。

だから、町の中をさんぽする時も、まわりをキョロキョロ見ながらあるいていて、あまり楽しむことができませんでした。

ふあんな気もちのまま、はじめてのとう校日がきてしまい、どうしようとドキドキしながら学校に行くと、おなじクラスになった子から、

「どこからひっこしてきたの？よろしくね。」

と声をかけてきてくれました。その時、わたしのふあんな気もちは、いっきにふきとびました。

わたしは、はずかしがりやなので、みずから声をかけることががてです。だから、その子から声をかけてきてくれた時は、とてもうれしかったです。そのことがきっかけでその子とおともだちになれたし、その日から、まい日とう校することが楽しくなり、ともだちもすこしずつふえていきました。

ともだちのやさしさや思いやりが、わたしの気もちをかえてくれ、学校もすきになり、しゅうまつにさんぽするきんし町も、すきになっていきました。

くやくしよや町で見かけるパンフレットには、スカイツリー

のような大きなシンボルだけでなく、わたしのしらないいろいろなものがのっています。すこしずつさんぽのはんいをひろげながら、いろいろなことにきょうみをもつてさがして、すみだくののみりよくをはっけんしていきたいと思います。

そしていつか、わたしがともだちにしてもらったように、てんこう生にはやさしく声をかけ、きんし小学校をすきになってもらい、はじめてすみだくにくる人には、町のことをすきになつてもらえるようなきつかけづくりができるような人になりたいと思いました。

あいさつはともだちのもと

第二寺島小学校 二年 鳥村 亮平

ぼくは、あいさつがすきです。なぜ、あいさつがすきかと言うと、その人とともだちになれたり、なかよくお話ができるようになったりするからです。そして、ともだちともなかよくなり、ともだちがいっぱいできます。

こう思うようになったきつかけは、けん太くんとの出会いです。ほいくえんのころの話です。道でともだちとあそんでいると、はじめて声をかけてくれました。

「おはよう、いれて。ぼくもやりたい。」

と言ってきたので、びっくりしたけどうれしかったから

「いいよ。」

と言いました。それからけん太くと親ゆうになりました。

のあちゃんとの出会いです。けん太くんが犬のあちゃんとあそんでいます。ぼくも入れてって言ったらいよいよって言ってくれてうれしかったです。えさをあげたりお手してくれたりふれあえました。けん太くんとなかよくなれたから、のあちゃんともなかよくなれました。あいさつをしてともだちをふやしていききたいです。のあちゃんのおかあさんにも名前をおぼえてもらえました。

あいさつというたったの一言だけで、そのおはようという朝のあいさつ一言だけであいてがいい気もちになれるんです。

ぼくはあいさつがとくいです。とくいになるには、三つのポイントがあります。一つ目はきんちようするけどえがおで近くまで行きます。二つ目は、大きな声で目を見てあいさつします。三つ目は、かえしてくれたあいさつにしつかりと答える。

この三つのポイントで、あいさつのわをひろげていききたいと
思います。

バイバイひいおじいちゃん

中川小学校 二年 池永 康誠

夏休みの土よう日の朝、電話がなりました。ひいおじいちゃんのごあいごがわるくなったので、かぞくみんなですぐにびょういんに行きました。ひいおじいちゃんはベッドでねていて、きかいでたんをすつてもらっていました。くるしそうだと思ったけどがんばっていました。さいごのおわかれだからみんなひいおじいちゃんにたくさん話しかけていました。ぼくは

「こうせいだよ。おはよう。」

と言いました。でも、いつも元気にしているひいおじいちゃんからへんじがこなくてさびしかったです。

そしてきかいがとまってびょういんの先生が

「9時20分いきをひきとりました。」

と言いました。そして、ぼくは、とてもかなしくなりました。

ひいおじいちゃんとの思い出はパソコンをおしえてくれたり、アイスをくれたりしたことです。みんなパソコンでゲームをやるのがたのしかったです。パソコンをおしえてくれたひいおじいちゃんはもういないけど、ぼくのいえにひいおじいちゃんのパソコンがあります。おしえてくれたゲームのやりかたも

おぼえています。ひいおじいちゃんは天国に行ってしまったけれど、ぼくたちが元気なでなが生きできるように空から見まもつてくれているとおもいます。だからぼくはひいおじいちゃんがよろこんでくれるように、みんななでなが生きします。

すずののだいぼうけん

押上小学校 二年 福田 鈴乃

わたしのおじいちゃんが四月にしんでしまいました。さいごに、会えたのは三月でした。とつぜんごあいごがきゆうにわるくなり、一人でひこうきにのり、おか山けんへ行きました。

空こうまでは、ママといっしょに行きました。空こうで手つづきをして、チケットをかいました。まっついているとひこうきのお姉さんがきてくれました。ちよつときんちようして、ドキドキしました。一人でひこうきにのるのは、はじめてでした。でも、お姉さんがとてもやさしくて、心づよかったです。ひこうきの中では、しらないおきやくさんのお姉さんとなりになりました。シートベルトのとめかたがわからなかった時、おしえてくれてうれしかったです。はなしかけてくれてあんしんしました。ぶじにとうちやくしました。空こうにパパがむかえに

きてくれて会えた時、自分が、（がんばったな）と思いました。
びょういんにつくと、とくべつにじじと会わせてくれました。
じじはくるしそうだし、つらそうでした。でも、会えてうれし
かったです。その時がじじに会えたさいごでした。

しんでしまいかなくなかったです。おそうしきでじじのおとも
だちがきていて（みんなさみしいんだな）と思いました。でも
じじはちかくにいて、いつもわたしをまもってくれていると
思っ、これからもまい日がんばります。

じじみてね。



私のふしぎな気持ち

中和小学校 三年 足立 栞理

正直に言います。「こんな妹なんかいららない」と、思ったことが何度かあります。それは、妹と同じです。

「ねえね、大きい」

と、よく言われます。ケンカの内容は、いつも同じです。おもちゃや本の取り合いをする時、思い通りに相手が動かない時、やくそくを守らない時などです。そんな時、お母さんはいつも言います。

「そんなにいやならいっしょに遊ばなければいいじゃない。」

それはそれでいやなのです。私は妹といっしょに遊びたいのです。だから今日も私は妹とケンカをします。

でも、一歩家を出ると私は変わります。妹のことをいつも気にかける、心配しようになります。学校のろう下で会えるとうれしくてだっこしてあげます。休み時間に用事がない時は、一年生の教室をのぞいて妹が何かこまっついていないかをかくにんし

ます。帰りの時間が同じ日は、大体いっしょに帰ります。

二人でならい事に歩いて行くときは、かならず手をつなぎます。そして、車道側と反対に妹がくるよう、いつも気をつけています。この前、

「くつが当たっていたい。」

と、妹に言われたので、私のくつと交かんしたことがあります。妹がきついくつは、私にとってもつきついです。そんな事は気になりませんでした。妹はぶかぶかの私のくつが楽しくて、きげんを直してくれたのでほっとしました。

なぜ、家にいる時と外にいる時では、こんなに自分の気もちが変わるのかふしぎでした。

三年前、お母さんが転んで足をこっせつしました。一カ月間、まっばづえで生活をしていました。二年前、お父さんがおなかのびょう気で入院をしました。お母さんもお父さんも今は元気になりましたが、私はとても心ぱいでした。家ぞくみんなが元気であることは当たり前的事ではないと思うようになりました。だから、妹がけがをしたり、何かトラブルにあったりする事を想像するだけで、私のむねが「キュッ」と、いたくなります。

そんな時は、妹の手をぎゅつとにぎると少しほつとします。

家にいる時は、お父さんかお母さんが私と妹を守ってくれるけど、外で妹と二人きりの時は、私が妹を守りたいです。その事をお母さんに言うと、

「愛だね。」

と、言われました。

私は今日も、妹とケンカをします。いじわるをしても、されてもいっしょに遊びます。私は今でも自分の気持ちや「愛」がよく分からないけれど、しっかりと妹の手をにぎって、これからも家ぞくを守っていききたいです。

いろいろな意見から学ぶ

業平小学校 三年 **岡本 瑠美**

私には二才年上のお兄ちゃんがいます。いつも意見がちがつて、よくけんかをします。私のお兄ちゃんが好きな物は、わたしはきらいで、私が好きなものは、おにいちゃんはきらいです。たとえば、お兄ちゃんに、一緒にサッカーしよう、とよく言われますが、私は一緒に、かけっこをしたり、鬼ごっこをした

う、と言ってくれただけでも幸せです。

けんかをした後、すぐに気持ちがおさまって、今まで一度もけんかをしたことがなかったかのように、また仲良く遊ぶこともありますが、すぐに仲直りができなくて、口げんかになって、お母さんに注意されることもあります。

でも私は、けんかをして仲直りすることは、すぐくすてきなことだと思っています。なぜならけんかをして仲直りするということは、ちがう意見を教えてもらった、ということだからです。

私とお兄ちゃんは、同じ家で同じように育てられているけれども、全くちがった意見があります。でも、けんかをするたびに毎回もつと仲良くなっています。

けんかはするけれども、お兄ちゃんはすごくやさしいです。だから、私はおにいちゃんのことを家ぞくとしてすごく大事にしています。お母さんも、みんな助け合いだいつも言っているから、私は家ぞくの一員として、お兄ちゃんが困っていたら助けたいです。

私たちは、みんなにやさしくしたり、助け合ったり、意見がちがう人から学んだりするために生まれてきたので、意見がちがつてけんかになるのは当然なことだと思っています。だから私は家ぞく以外の人たち、たとえば日本の友だちや、ルクセンブ

ルクの友だちも、ロンドンの友だちもちがう人の意見を聞いて
今まで学んできました。これから、けんかをすることもある
かもしれないけれど、仲直りをしながら、いろいろな人の意見
を聞いてもっと学んでいきたいです。

ぼくとおおじじ

横川小学校 三年 皆川 泰輝

ぼくのおおじじは、か川けんにすんでいます。今年のたん生
日で九十四才になります。おおじじは、ぼくのお母さんのおじ
いちゃんです。四十才くらいの時にびょう気で耳が聞こえにく
くなったそうで、ほちょうきをつけています。だから、話をす
る時はしっかり口を開けて、大きな声で話します。そうすると
口の動きで何を言っているのか分かるのだそうです。

おおじじは遠くにすんでいるので、なかなか会えません。そ
れに電話だと口元が見えないし話ができません。だから、ぼく
はおおじじに手紙を書きます。いつもはじめに「おおじじ元
気？ぼくは元気だよ！」と書きます。ぼくは毎回、返事を楽し
みに待っています。おおじじは手紙で、ぼくにいろいろな科学
の話をしてくれます。それから面白い算数の問題を教えてくれ

ます。ぼくは、そんなおおじじが大好きです。

今年の七月に、おおじじにびょう気が見つかって、手じゅつ
をうける事になりました。それで夏休みに会いに行きました。
ひさしぶりにおおじじに会えてとってもうれしかったです。
びょう気はていきけんしんで見つかっただけだから、どこ
もいたくないし、しんどくないと言って、元気そうで安心
しました。そして、また科学の話をしてくれて、大事にしてい
た虫めがねをくれました。

「二十ばいでよく見えるんや。」
と、にこにこしながらわたしてくれました。

前におおばばがなくなった時は、ぼくはまだ小さかったので、
あまりおぼえていません。だけど、目の前でこんなにふつうに
話をしているおおじじが、もうすぐなくなってしまうかもしれ
ないと思ったら、さみしくなりました。そしたらおおじじが、
「じゅん番だから、ええんや。」

と、わらって言いました。それを聞いて、ぼくの命は、おおじ
じから、もっと前からずっとそうしてつづいてきたんだなあと思
いました。ぼくはおおじじの物知りで、何才になっても新し
い事をべん強しているところが、すごいなあと思います。ぼく
にもおおじじのいいところがそうやってつたわっていたらうれ

しいなあと思いました。

その後、家ぞくで話し合っ手じゅつはうけないですごくすこ
とになりました。おおじじは、

「あと一、二年やな。」

と、言いながら、やっぱりにこにこして、新しい本がとどくの
を楽しみにしていました。ぼくは、そんなおおじじがやっぱり
大すぎだなあと思いました。来年の夏休みも会いに行きます。
だから、もうちょつと長生きをしてほしいな。

人と人とのふれあい

第三寺島小学校 三年 ゴウ 偉来

「人と人とのふれあい」と聞いたとき、ぼくは親友のことを
思いうかべました。

その親友とは、二年生になって友だちになりました。三年生
になって大親友になって、いろいろなことを話したり、体育館
や校庭で遊んだりしています。学校外でも、親友が家に遊びに
きて、遊んだこともあります。学校に登校するときも、正門で
よくいっしょになります。ぼくは、親友といっしょにいと、
いつも楽しい気分になります。

ある日、学校から帰るとき、親友が他の人たちをキラムコへ
さそっているのを見ました。ぼくもさそってくれるのかなと
思ったけれど、親友はぼくをさそいませんでした。ぼくは、う
らぎられたような気もちでかなしくなつて、いかりの気もちで
いっばいになりました。

家に帰つてから、ぼくはしゆくだいを終わらせて、自転車で
キラムコにむかいました。キラムコに着くと、親友とみんなが
遊んでいました。親友は、ぼくに気がつくところこんで走つて
きました。

そして、ぼくたちは、おにごっこをして遊びました。遊んで
いるとき、ぼくは気づきました。親友はぼくをうらぎつたので
はないと。ぼくの家が遠いから、行けないと思つたのかも知れ
ないと。遊びながら、ぼくは、おこつていたのをすっかりわす
れていました。

人と人とのふれあいは、うれしかったり、楽しかったり、や
きもちをやいたり、いろいろな感じようをもたらすと思います。
人と人とのふれあいがなかつたら、さびしくなるし、物足りな
い気もちになると思います。楽しいことばかりじゃないけど、
人と人とのふれあいは、人とつながること、ぼくにとつて、
とてもひつようなことです。

すみだっ子のゆめ

中和小学校 四年 松田 和奏

ぼくは、墨田区が好きです。なぜかというところ、ものごとろついたところから墨田区に住んでいて、保育園も幼稚園も小学校も墨田区。友達がたくさんいます。

墨田区のいいところは、区民のためにしてくれることが多いことだと思っています。ぼくもそのプロジェクトのひとつに応募して支えんを受けたことがあります。そのプロジェクトは墨田区青少年育成委員会連絡協議会が新型コロナウイルスのせいで行事が制限されている子どもたちのゆめをかなえたいと企画してくれたもので「すみだっこたちの夢支援プロジェクト」という名前のものでした。ぼくは小さいころからずっと船長になりたいので、船長の体験がしてみたいという希望を出しました。なんとその希望がかない、東海汽船さんが手をあげてくださいました。体験当日は、船長さん・乗組員さん他多くの方といっしょに停泊中の船に乗りこみ、ふだんは立ち入れないボイラー

室・そうだ室などを見せてもらったり、船が動く仕組みをいねいに教えてもらったりしました。船長になることに日々あこがれているぼくにとって、まさにゆめのような体験でした。

もうひとつ、墨田区とのかかわりで気に入っていることがあります。それは、すみだ子どもPR大使として活動し、墨田区のみりよくを発信できていることです。例えば、ゴミ拾いをスポーツのように楽しみながら墨田区をきれいにしたり、墨田区のシンボルの一つとも言える国技館の裏側をみせてもらいその様子をPRしたりしています。区長さんと交流できるきかいが多いことも、うれしいです。任期が決まっているため、あと半年ほどで任務期間が終わってしまうのですが、最後まで全力で墨田区の方たちと関わっていきたいと思っています。

このように、ぼくは生まれた墨田区で育ち、地域の人と多くせっついています。そんな中でぼくが感じるのは、墨田区って「人」みたいだ、ということ。区の人たちもやさしい。サポートが思いやりに根づいていて、地域の人たちもやさしい。そんなところから、墨田区にふれるときには、いつも温かさを感じるのです。

ぼくにはゆめがあります。こうしてお世話になった墨田区へ、大人になったらおんがえしをしたい、ということ。今の時点では具体的になにができるかいえませんが、自分がしてもらったことと同じように、地域の人のこころを温めることができたらうれしいです。いつもありがとうございます。

みんなへのおん返し

柳島小学校 四年 小沢 結理

わたしは、一年生の時に一輪車から落ちてひじを骨折したことがあります。その出来事を改めて振り返って感じているのが「みんなへのおん返し」をしたいという事です。

学童で遊んでいる時にそれはおこりました。転んでも最初は立ち上がれると思いましたが。けれどその後には大きな痛みが、おそつてきて思わず泣いてしまいました。いたみがひどくなり、学童のしよく員さんが病院につれていってくれました。私が泣いていると友達が、

「大じょうぶ？」

「立てる？」

と心配してくれました。

病院では骨折としんだんされました。するとお母さんがギブスをつけていても着られる大きなサイズの服を買ってくれました。それは私が着がえやすくするためです。お父さんは骨折していてもすわれるようにぎいすを買ってくれました。

骨折後はしばらく学校を休みました。学校にまた行くことになった日、不安な気持ちになりました。それは、また転んだらどうしよう、今まで通り学校生活をすごすことができるかなという思いからでした。また、いつもより大きい服を着ていることを何か言われるかとても心配でした。そんな不安な気持ちで学校に向かいました。教室に着き友だちからは、

「大じょうぶ」

「どうしたの？」

とたくさんの声をかけてもらいました。他にも帰りに荷物を持ってくれたり、はげましてくれたりしました。学童でも私が骨折していてもできる遊びをゆう先してくれました。トイレもむずかしかったので友達に手伝ってもらいとても助かりました。ふつうは、他の人のトイレは見たくないと思います。けれどもやな顔をせず進んでお手伝いをしてくれました。登校前は不安な気持ちでいっぱいでした。でも友達が声をかけてくれたり、手伝いをしてくれたりしたおかげで不安な気持ちはなくなりま

した。骨折はしていても、気持ちはふだん通り安心してすごせました。

骨折した経験を通して今感じていることは家族や友達への感しゃです。骨折をして、とてもいたかったし、つらかったことがたくさんありました。でも楽しいことも、助けられてうれしかったことがそれ以上にたくさんありました。そう思えるのは、一番近くでささえてくれた家族、親切にしてくれた友達のおかげです。家族はもちろん、友達はたよりになるし、かけがえのないそんざいです。私も助けてくれた人達のように誰かがこまっている時は進んで助けてあげたいです。そして同じように助けてあげたいと思っています。それが助けてくれたみんなへのおん返しになると思うからです。

近所のおばあちゃん

第三吾嬬小学校 四年 柴田 一花

私の家の近くに住んでいるおばあちゃんは、毎朝私が学校に行く時、あいさつをしてくれます。(私のおばあちゃんではありません。)

「おはようございます。」

と言うと、

「ありがとうね。がんばってね。」

と言われます。いつもあいさつをしただけなのにありがとうとお礼を言ってくれるのはなぜだろうと思っていました。

ある日の放課後、友達と遊んでいた時にそのおばあちゃんに会いました。私がチョコレートあげたらとてもよろこんでいました。おばあちゃんはお返しに、万げきょうのキットをたくさんくれました。

その後、私はまだ遊んでいたのですが、そのおばあちゃんが私の家に来たようでお母さんから話を聞くと、そのおばあちゃんは泣きながら、

「さつき、こちらのお子さんからチョコレートもらってとてもうれしかったんです。毎朝あいさつをしてくれて本当にありがとうございます。」

と言っていたそうです。お母さんは、

「こちらこそ毎朝子ども達を見守ってくれてありがとうございます。」

と話したそうです。

おばあちゃんは、雨の日でも暑い日でも寒い日でも毎朝家の前まで来て登校している私達に声をかけてくれるのです。だか

らお礼を言わないといけないのは私だし、なんで泣いていたのかなと思ってお母さんに聞いてみると、

「おばあちゃんは、自分の孫が別の所に住んでいて、なかなか会えなくてさみしいみたい。それに子供が好きだから、毎朝あいさつをして、子供とふれ合えてうれしかったんだろうね。」
と言っていました。

私の本当のおばあちゃんは自転車で十分ぐらいの所に住んでいるので、会いたくなったらいつでも会いに行けます。私のおばあちゃんは、お世話好きで、声が大きくて、ないしょ話ができない人です。毎日運動をしていてえらいけど、

「ダイエット中だよ。」
と言いながらお菓子をバリバリ食べるタイプのおばあちゃんです。近所のおばあちゃんとは全くちがうので不思議な感じがありました。

私の住んでいる町には地域の子どもを見守ってくれる人がたくさんいます。だから私達は安心して過ごせていると思います。これからも、身近な人達にありがとうの気持ちを忘れずに過ごしていきたいと思います。

「私にもできるボランティア活動って？」

東吾孺小学校 四年 池川 彩未

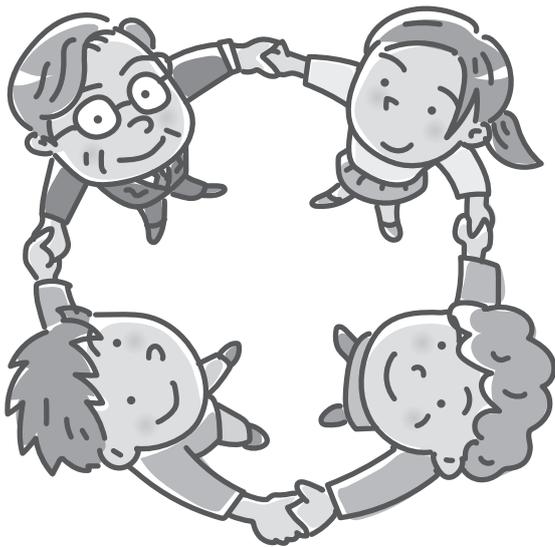
私のお父さんはフラメンコギタリストです。私が生まれる前から老人ホームでギターえんそうをする活動をしていました。おじいちゃんは、小学校で働いていましたが、退職後は民生委員や町会のボランティア活動をしていて、登校する子どもたちのために横だん歩道で毎朝旗ふりをしています。「子どもたちがおはようと言ってくれるのがうれしい。」と言うおじいちゃんを見て、私も小さいころから地域のみなさんのために私にできることって何だろうと考えてきました。「私たち人間は一人では生きていけないから、できることを協力していくことが大切なんだよ。」とおじいちゃんは言います。

私は保育園のときから、フラメンコやバレエ、ピアノなどを習っていたので、年長組の時に初めて、よく遊んでいる児童館でフラメンコをおどったり、バレエをおどったり、バイオリンを習っている保育園のお友達と一緒にバイオリンとピアノでえんそう会をしたりしました。小さい子も、お姉さん、お兄さんもよろこんでくれたのがとてもうれしくて、もっと上達してがんばろうと思いました。

ところがコロナで、小学一年生の時は何もできなくなりました。それでも、三年生の去年、近所の老人ホームでフラメンコをおどりました。私のおどりでよろこんでくれるのかときんちようしましたが、老人ホームのみなさんもスタッフのみなさんもととてもよろこんでくれてホッとしました。それから、お友達もさそって町会の老人会で、フラメンコとバレエ、バイオリン、ピアノのえんそうをしました。たくさんのはく手をいただき、「また次回も。」と言ってくださったので、今年の夏休みも老人ホームと町会の老人会でフラメンコをおどりました。みなさんの笑顔がとてうれしくて、練習は大変で足のつめがわれたりしてすごくいたい時もありましたが、がんばってきよかったです。バレエとバイオリンのお友達も同じ保育園でしたが、小学校ではなれてしまったので、今もボランティア活動をすることによって、共に練習をしたりできることもうれしいです。

コロナで集まるのが難しい時期でしたが、私のおどりや楽器えんそうで笑顔になってくれる方がたを見ていて、私たち人間はみんなでおしゃべりをしたり、何かを楽しむことで元気になることが大切だと思いました。私の住んでいる地域では、高れい者の一人ぐらしも多いのですが、何かを企画すれば楽し

みにしてくださる方がいて、町会の老人会の方も協力して、ご近所の家などに声をかけて参加して、そこでまたつながりが大きくなります。これからも地域のみなさんと一緒に楽しい企画を考えて、みんな元気に過ごすことができるお手伝いを、私にできる特技を生かしてがんばり、地域とのつながりをさらに大きくできるようにしていきたいです。



小学校 五年生の部

マスクを外した喜び

緑小学校 五年 加藤 礼菜

「おはよう。」

教室の扉を開けると、クラスメイトの満面の笑顔が広がっています。五年生になり、マスクを外す人がふえ、みんなの表情がよくわかるようになりました。

二年生からずっと、コロナウイルスにより常にマスクをつける生活でした。

マスクをつけていると、相手の表情がよくわからず、どのような気持ちなのかわかりませんでした。

友達の表情がわからないことで、どのように友達に声をかけてよいのかわからず、困ったこともありました。

マスクを外すすばらしさを二つ見つけました。

一つ目はマスクを外すことで友達がうれしいのか、さみしいのか、怒っているのかがよくわかります。

友達の表情から気持ちが変わることで、毎日の学校生活がよ

り明るく楽しくなりました。けんかをして、表情を見て声をかけ、自然と仲直りすることもできました。

二つ目は、マスクを外しみんなのあいさつがより元気になりました。

私はあいさつの声が小さいとよくお母さんに言われます。小さくなってしまふ理由は、はずかしい気持ちがあるからです。

でも、マスクを外し元気よくあいさつをしているうちにうれしくなり、はずかしさはなくなっていきました。改めて、マスクを外して友達と関わっていく良さに気づきました。

マスクを外すことで相手の表情や気持ちが変わるようになりました。また、友達の声が聞こえて幸せな気持ちになりました。

コロナかの生活は不自由なことが多くありました。しかし、さまざまな困なんをのりこえてきました。

あのころマスクをつけていたからこそ今、クラスメイトの笑顔がとてもあふれていると思います。

最後に、あいさつは相手の気持ちを考えるということが大切です。元気よく言えば言うほど相手は安心します。

これからも元気よく大きな声でそして笑顔であいさつをして

いきます。

Thank you for everything!

両国小学校 五年 初山 香都

「Nice to meet you! 初めまして!」

「I'm Koto. 香都です。」

私は胸を高鳴らせながら、母と一緒に心を込めて製作したウェルカムボードをかかっていた。

その三ヶ月前、母がこの夏にホームステイの受け入れをしないかと突然提案した。皆、

「え? いいね。面白そう。」

と、気軽に賛成したが、留学生の部屋などを用意するにつれ実感が湧き、私は少し緊張してきた。

(どんな人が来てどんな生活が始まるのだろうか。)

一人目は、アラブ首長国連邦から来た十七歳の男の子だ。日本語を勉強していて、簡単な言葉なら伝わった。彼が理解しやすいように、なるべく簡単な単語を使い、日本語で会話をしよう家族で心がけた。「だいじょうぶ」が口癖の穏やかで気遣いをしてくれる優しいお兄さんだった。母の手料理をいつも残

さず食べてくれた。

二人目は、アメリカのテキサス州から来た十七歳の女の子だ。挨拶以外の日本語はほとんど分からないため、「お風呂に入る」等、日常生活でよく使う言葉を紙に書いて貼り、教えたりした。苦手そうな日本食もお箸でも「I'll try.」と挑戦する、明るく笑顔が素敵なお姉さんだった。

ホームステイ受け入れ前、家族でホストファミリーとしての心構えについて話し合いをした。自分が留学生だったら、日本での生活に期待をしながらも言葉の通じない知らない土地や家庭で過ごすことを少し怖く思い緊張すると思った。だから、相手の気持ちを想像して接しようと思った。また、家族の一員として遠慮しすぎず希望を伝え合い、普段通りの生活をするのも大切だと思った。

受け入れ初日は、私も家族も留学生も緊張感があり、少しよそよそしい雰囲気だったように思う。だが、日々一緒に、かるたや書写、ゲーム、お出かけをしたり、食事をとったりすることによって、仲が深まり「家族の一員」として接することができようになっていった。お別れの時は、家族が減るような感覚になり淋しくなった。だけど、家族なら心の中に居続ける。

留学生と一緒に暮らすという体験で二つのことを学んだ。一

つ目は、国や文化、言葉が違ってても、心が通じればコミュニケーションをとれるということ。二つ目は、外国人というだけで心の壁を作ってしまうがちだが、感じることは同じで、私たちが何も変わらないということ。

これからは、人に対して壁をもたずに接していきたい。

最後に、二人の新しい家族へ

「わが家に来てくれてありがとう。またね。」

笑顔の花を咲かせよう

菊川小学校 五年 鳥谷部 絢央

わたしは人とのふれあいでまずすることはあいさつだと思えます。そして、そのあいさつが自然に出来ることがいいことだと思います。わたしは学校では先生方はもちろん、クラスの友達やクラス以外の友達にもあいさつをします。あいさつの後には会話が生まれ、今日の服そのの話や放課後遊ぶための待ち合わせの話をしたりします。このようにあいさつをすることで色々な会話が生まれます。

あいさつをすることのメリットをいくつか紹介します。

メリット一、大きな声であいさつをすると気持ちがいい。

メリット二、笑顔になる機会が増える。

メリット三、相手からの印象が良くなり人間関係も良くなる。

メリット四、常識のある人という評価を得られる。

メリット五、あいさつから会話が始まる。

先日、同じマンションの小さい女の子に会った時あいさつをしたら笑顔であいさつを返してくれました。エレベーターに乗り、おりる時もずっと手をふってくれてとてもかわいかったです。女の子のお母さんも笑顔で見送ってくれて、あいさつとてもいいなと思いました。家に帰ってからお母さんにこのことを話したら、

「お母さんもよく会ってあいさつするよ。あおちゃんくらいのお姉さんが大好きな年頃だよね。」

と二人で笑顔になりました。

春に熊本へ旅行に行った時の話です。とても長い階段を上った先にある神社へ向かっている時にすれ違ったおばさんとあいさつをしました。下って来たおばさんは

「もう少しで着くわよ、がんばって。」

と声をかけてくれました。そのはげましのおかげであともう少しがんばることが出来ました。また、下る時にはわたしも上がつてくる人を応援したい気持ちでこんにちはとあいさつを

しました。こんな初めて来た場所で知らない人とあいさつをするなんて思ってもいかなかったです。このあいさつは応えんされたり応えんの気持ちがかもったとても気持ちのいいあいさつでした。

このようにあいさつには色々な意味があり、することのメリットはいっぱいあると思います。あいさつは相手がいなくて出来ないことです。あいさつは人とのふれあいの第一歩でその後にくく会話の種であるとわたしは思います。その種をいっばいまいて笑顔の花をいっばい咲かせたいです。

大切な二人へ

立花吾孀の森小学校 五年 寺沢 妃愛

人との別れは、本当に悲しいです。この間、私は祖母とお別れをしました。その一年くらい前には、祖父が病気で亡くなっているのです。大切な家族がいなくなるという経験は初めてではありません。でも、短い期間に両親を失った母の気持ちを思うと胸が痛くなります。

祖父は、趣味の多い人でした。特にカメラの腕前は、プロのカメラマンみたいでした。私たち兄妹の運動会には毎年来て、

写真を撮ってくれていました。私の家には祖父が残した写真がたくさんあります。大切な宝物です。祖母は、本を読むことが好きで、新聞の中に新しい本の情報が書いてあると必ずチェックしていました。自分が読みたいと思う内容であれば、本屋さんに行きに行くのです。一緒に行くと、私の欲しい本も買ってくれました。亡くなるまで祖母は、病院に入院していたのですが、買ったままの本が一冊残っています。足が悪く、買いに行けなくなった祖母が母に頼んだものでした。治って家に帰ることができたら、ゆっくり読むつもりでした。けっきょくは読めないままになってしまいましたが、その本は母が読んでいます。持ち主がいなくなっても他の人に読んでもらえて、祖母も本も喜んでいいると思います。祖母が残した本もたくさんあるので、おもしろそうな本があったら私も読んでみたいです。祖母が残してくれたものも大事にしたいと思いました。

今年は、祖父母の法要を一緒にやりました。担当してくれたお寺のお坊さんの話を聞く時間があつたのですが、子どもの私でもわかりやすいように説明してくれました。

「おそう式は、お別れの間ではなく、出会い直しの場なのです。亡くなった人に出会えたこと、今までしてくれていたことがあたり前じゃないということに気づいて、最後にありがとう、ご

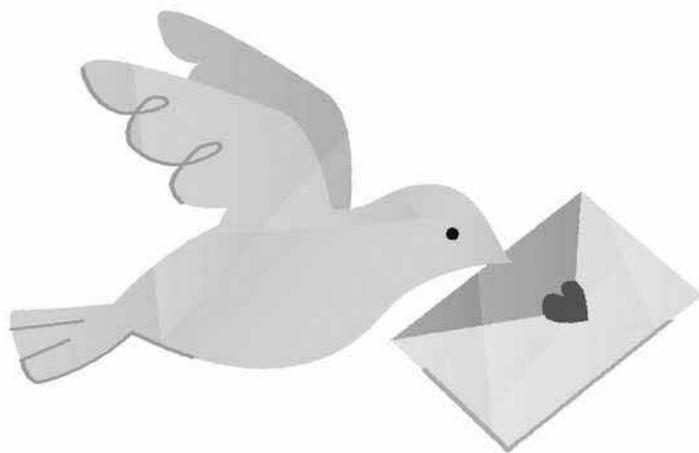
めんなさい、そして決して忘れませんと出会い直すチャンスがおそう式なのです。そして、亡くなった時と人々の記憶から消えた時の二回、人間は死ぬと言われています。亡くなった人を忘れずに思いだすために法事はあると考えられています。悔いなく生きて欲しいという亡くなった人からの私たちへの願いを確認できる会だと思っています。」

わかりやすく説明と言ったけれど、私には難しく、お坊さんがくれたプリントの内容を書きました。亡くなった人の話をするだけでも喜んでもらえるそうです。

このお寺では、亡くなった人への手紙を書くことができます。こっそり母の手紙をのぞきました。

「元気ですか。二人がいたから子どもたちを育てられました。ありがとうございます。」

母は、紙いっぱいの手紙を書いていました。私もたくさん書きました。内容は秘密です。祖父母に届いていますように。



小学校 六年生の部

夏休みで学んだこと

緑小学校 六年 今村 香介

ぼくは、夏休みに人との関わりについて、学んだことが四つあります。バスケットの合宿を通して学んだことを書きます。

一つめは、他学年との関わり方についてです。同じ年の人とコミュニケーションをとったり、指示を出したりする時は、特に意識しなかったけれど、低学年には、どうしたら分かりやすく伝わるのか考えました。例えば、低学年の子に、

「布団をしいて」

と、声をかけたら、うまく伝わらずに、しいたけれど、向きが反対でした。そこで、ぼくが最初にしいて、手本として見せました。合宿の最後の日には、あまり考えずにうまく指示を出すことができるようになり、低学年の子も言われたことをすぐに理解してくれました。

二つめは、挨拶の大切さについてです。知らない人であっても、「おはようございます。」「こんにちは。」と挨拶をすると、

相手の人が笑顔になったと感じました。また、ぼくが挨拶をされた時も、なんだか元気が出てきたのです。うれしくて、夏休み中なるべくたくさんの人に挨拶をするようにしました。

三つめは、感謝の気持ちについてです。「ありがとう」と言葉にすることはもちろんですが、何でもやってもらうことが当たり前ではないことも自覚しました。感謝の気持ちがないと、人への礼儀もくずれてしまいます。例えば、ぼくが健康的に毎日過ごせているのは、お母さんお父さんが、栄養バランスを考えて料理してくれているからです。他にも、バスケットの練習ができるのは、親やコーチがバスケットコートを借りてくれているからです。このように、ぼくは、たくさんの方の協力で、楽しく元気に暮らしていることに気付きました。

四つめは、友達との関係についてです。友達との関係が深まると、バスケットのプレイもうまくいくことがわかりました。合宿の中では、一緒にプレイをするだけでなく、食事をしたり夜、話しをしたりしました。相手のことをよく知るには、相手の話をよく聞くことが一番だと思います。今回、友達の話を聞いてみると、自分で考え直したり参考にしたりすることがあり

ました。友達との絆が深まると、自然と言葉使いも変わってきます。よいプレイができた時に、ほめ合ったり、うまくいかないうちに、はげまし合ったりすることで、プレイの質もあがったような気がしたのです。初めて会った人とも、合宿を通して仲良くなり、前よりもプレイ中の連携がうまくいくようになりました。

ぼくは、このような経験を通して、人とのつながりや生活の中で気持ちよく生きていくことの大切さを学びました。

心の支え

横川小学校 六年 浅野 心

「晩ご飯ができたよ」

この母の声を聞くと家族みんながリビングのテーブルに集まります。私は、この時間がとても好きです。朝は家族みんながいそがしく、ゆっくりご飯を食べることができません。昼もいっしょには食べられません。ですが晩ご飯だけは、家族みんなで食卓をかこんでゆっくり話をしながら食べることができます。私は、このことがあたりまえでなかったからこそこの時間が幸せだと思ふのかもしれない。

私が幼いころは、父も母も夜おそくまで仕事をしていて、晩ご飯はいつも兄と二人でした。兄と食べるご飯は、なんだか少しさめているような気がしました。その日の出きごとなど兄と話していても、なんだかものたりないような気がしました。だからこそ母が父がいて私がいるこの時間が好きです。この時間があると、今日は家族にどんな話をしようかなって、毎日が楽しくなります。学校の話をしたら父や母が

「がんばったね、すごいね」

ってほめてくれたりします。だから今日はがんばろうって思ったりすることが出来ます。どんなにつかれた日でも、この時間は私の心をいやしてくれます。母のつくるあたたかいみそ汁に父がかけてくれるあたたかい言葉、兄がしてくれる面白い話、この時間は毎日の私の心の支えであり、なくてはならないものだと思っています。

この時間がいつまであるかわからないからこそ、この時間が特別で大切にしたいと思っています。この時間が家族みんなの心の支えになっていると思います。

私も、家族みたいにだれかの心の支えになって、だれかを楽しませられるような人になりたいと思っています。また、こまっている人がいたら、家族といっしょにいたときみたいなあ

たたかい場所をつくってあげたいと思います。

おばあちゃんの優しさ

第四吾孀小学校 六年 矢花 正騎

ぼくには、おばあちゃんがいます。おばあちゃんは優しい人です。ぼくがおばあちゃんに会いに行くと、いつも喜んでアイスクャンディーを出してくれます。とつても元気で明るいおばあちゃんです。ぼくのおばあちゃんは、戦時中に長野県の乳牛を飼っている家に生まれたそうです。小さいころに自分が経験した戦争の話を聞かせてくれたことがあります。

今は八十才を過ぎていて、腰が少し曲がっているけれど元気に過ごしています。ぼくは休みの日に予定がないときはよく会いに行っています。おばあちゃんの家に行ったら、亡くなったおじいちゃんとおじさんにお線香をあげてからテレビですもうやニュースと一緒に観ます。このときおばあちゃんは買っておいてくれたサイダーやコーラなどを出してくれます。

おばあちゃんは、ぼくの家の近くの団地に一人で住んでいます。しかし心配はありません。なぜかと言うと、いつも同じ団地に住んでいる人がおばあちゃんに会いに来ているからです。

ぼくがおばあちゃんの家に行ったときも来ていて、一緒にテレビを観たりお話をしたりしたことがあります。なので、一人で住んでいてもさみしくはないと思います。

団地の人が、おばあちゃんの家に来てくれるのには理由があります。おばあちゃんは普段から、家にくる人の買い物を手伝ったり、病院に付きそつてあげたりしています。なのでそうした人たちがおばあちゃんを慕って家にやって来るのだと思います。ぼくは、そんなおばあちゃんをとて誇らしく思っています。助けたり助けられたりしながら過ごしているおばあちゃんがとてもかっこよく見えます。

ぼくは、こんなおばあちゃんのことを前に一度友達に話したことがあります。するとその友達は、

「買い物に行つてあげるとかパシリみたいじゃん。」

と言いました。ぼくにはそれがとてもショックでした。おばあちゃんは、人のために自分にできることをしているのに、それが理解してもらえずとても悲しかったです。しかし、そんな言葉が言われてもおばあちゃんに対するぼくの気持ちは変わりません。

おばあちゃんを見ていて、ぼくは優しさについて考えたことがあります。それは、優しさには深さがあるということです。

勉強をする中で問題の答えを友達に教えるのは浅い優しさだと思えます。だけど、問題の解き方（ヒント）を教えてあげるのは深い優しさだと思えます。

ぼくは、おばあちゃんの深い優しさを目の前で見ていて、困っている人がいたら率先して助けてあげられる人になりたいと思えました。

あいさつ

八広小学校 六年 増田 昊輝

ぼくは、あいさつが好きです。理由は学校など地域の人と顔を合わせた時一番最初にするのがあいさつだからです。あいさつを交わす事で相手と心が通じ合うと思います。ぼくは野球を習っています。野球の練習でも一番最初にする事はあいさつです。

あいさつにはいろいろな種類があります。「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」すべてあいさつです。あいさつをすると仲の良い人はもっと仲良く、知らない人ともつながりをもつきっかけになると思います。ぼくがあいさつを好きになったきっかけは友達から「おはよう」と言

われたときに、すぐくうれしかったからです。それからぼくは毎日友達より先にあいさつするように心がけています。

もうひとつのきっかけは、食事の前後のあいさつです。「いただきます」「ごちそうさま」と心を込めて言うことで、食料を育ててくれた人、調理をしてくれた人など、自分がいただく食事に関わった人達への感謝の気持ちを伝えることができます。そして、顔の見えない場所でも人とのつながりを感じる事ができると思います。

またあいさつに限らず、声をかけ合うことを大切にしています。例えば野球でピッチャーがボールを投げるたびにみんな声をかけ合います。次のプレーを確認したり、良いプレーが出た時は「ナイスプレー」と皆でほめ、ミスをしてしまったときは「ドンマイ」「次はがんばろう!」と声をかけ合ったりして、はげまし合います。そうすると、自分に自信がついたり、不安なプレーも落ち着いてできたりします。またチームのふん囲気も良くなり、良いプレーにつながります。

あいさつは人とつながる大切な役割をしています。けれど、そのあいさつの仕方や声かけの仕方によっては相手をきずけたりいやな思いをさせることもあります。例えば大きな声で相手の顔を見て言う「おはよう」と、顔を見ずに小さな声で言う

「おはよう」では相手に与える印象が違います。同じ「おはよう」なら大きな声で顔を見て言われた方がうれしくて気持ちが良いと思います。だからぼくは、相手への思いやりをもってあいさつをしていきたいです。そしてそれを続けることでたくさんの人とのつながりを持ち、そのつながりを大事にしていきたいと思います。大好きな学校の仲の良いクラスで過ごす時間はあと少しですが、心でつながった友達はずっとつながっているとと思います。



中学校 一年生の部

見て見ぬふり

吾孀第二中学校 一年 西垣 実杜

私は、自分の住んでいる地域の人はとても素敵だと思います。なぜなら、道を聞くと丁寧に教えてくれたり、あいさつをするとき、しっかりと返してくれたりするからです。他にも、近所の人ならおすそわけをしてくれたり、お土産をくれたりします。周りにそのような温かい人達がいると、自分もそんな素敵な人になりたいなと思います。

そんな素敵な地域ですが、いろんな人がいます。生活をしている中で、私も含めて、気を付けなければいけないと思うことがありました。それは、見て見ぬふりです。以前、こんなことがありました。私が下校中の時、服屋さんの前で服の棚が倒れていたのを、勇気を出して直そうとしていたところ、通りかかった近所の人が、

「倒しちゃったのね。」

と呆れたように、言ってきました。私が棚を戻そうとする前から、道には人が通りかかっていたのに、誰も手を貸してくれる人はいませんでした。なぜみんな、見て見ぬふりをしているのか、疑問でした。それどころか、私が倒したと思われるのは、なぜだろうと、少し悔しかったです。

けれども、みんながみんなそうとは限らず、優しく手を差し伸べてくれる人もいます。以前、友達と遊んでいた時、人が倒れているところを見かけました。すぐに周りの人が救急車を呼び、処置をされていて、そのおかげか、倒れた人もすぐ意識を取り戻していました。私は助けている周りの人を見て、とても優しいなと思いました。当たり前のことかもしれないけれど、すぐに行動に移せる人がたくさんいて、とても素敵だなと感じました。私はその時、まだ携帯電話も持っていなかったのですが、何も出来ませんでした。今の自分なら、周りの人達と同じように、救急車を呼んだり、周りの大人に助けを求めたりすることが出来ます。

このように、人の生命に関わる、とても大きなことで行動することも大事ですが、小さなことで困っている人がいても、自

分から行動することはとても良いことのように思います。私の地域の人達が、一人一人このような考え方を持ったら、みんな良い気持ちで過ごすことができ、この地域全体も、とても良い環境になると思います。

私は、地域の人を含め、この町がとても大好きです。大きなことでも、小さなことでも、困っている人がいたら、すぐに優しく手を差し伸べられる人が今よりも更に増えたら、もっと素敵で、自慢の故郷になると思います。

「正しいから仕方がない」

文花中学校 一年 浪川 優稀人

「だって本当のことじゃん。」

誰かが喧嘩していると、時々耳にすることのある言葉です。確かに、言っていることは正しくても、だからといって言っている良いことではない時もあると思います。

インターネットが普及し、誰でも、声も顔も知らない人に向けて、言葉を発信することができるようになりました。それから、誰かが正しくない言動をしたり、正しくない行動をすれば、大勢の人がその人を責めるようになりました。大勢の人の言っ

ていることがどれだけ正しいことだったとしても、それがいきすぎた時、人の命を奪うこともあるというのは、とても悲しいことです。

私も、本当のこと、正しいことが人を傷つけていることを体験したことがあります。

私の小学校は、人数が少なく、ほとんどは一クラスでした。一年生のとき、真面目で優しい性格の人は、その性格からか、クラスで多くの人がその人の周りに集まりました。しかし、その人は集団でいることはあまり好む方ではなかったので、どうにかして人が集まらないようにしていました。誰かが近づいてきたら、大袈裟に逃げてみたり、誰かが腕を触ってきたら、そこは触ると痛むからやめてほしいと怒ってみたり。その人へ集まっていた人は、段々とその人が嫌がっていることを感じるようになって、少しずつ離れていきました。それでも、その人の人柄の良さをクラスの人は知っていたから、程良い距離感で楽しく話していました。

それから、六年生になりました。六年生になって、ある時に、真面目で優しい性格のその人の肩をいきなり揉んだ人がいました。肩を揉まれた子が何かを言おうとしたときに、二人を後ろから見ていた人があることを言いました。一年生の時、人が集

まらないようにするために、腕を触られたりしたときに言っていた言葉でした。学年が上がるにつれて、その言葉を聞くことはなくなっていきましたが、一年生の時は何回も言っていて、よく記憶に残っていました。そのおかげか、後ろから見ている人が言ったことがきっかけで、その言葉はみるみるクラスで流布していきました。誰もがいじるようにその言葉を発していくせいで、その人は、一番最初に言い出した人に怒って、やめてほしいと頼んでいました。私はその人と登下校のルートが同じだったので、相談を受けたので、この日にやめてもらうことを頼むと知っていました。そのため、会話に聞き耳を立てたところ、

「ごめんね。自分で最初に言っていたから、これからはしないけど、今までののは仕方なくないかな。」

と言っていたのが聞こえました。確かに、自分で最初に言っていたのは事実です。しかし、だからといっていじって良いわけではないですし、仕方ないというのも違います。

事実だとしても、正しいことだったとしても、それを理由に悪いことではないというようになるは違うと思います。人が嫌がるのが、正しいからなかったことになるわけではありませ

現在のインターネットでも、同じようなことが起きていると思います。誰かが正しくないことをしたときには、「あの人は正しくない。だからそれを責めている自分は正しい。」というような考えから、いきすぎた言葉を放って人を傷つけています。正しいことは、だから何をしても良いという免罪符でも、許証でもありません。正しさの中にも、簡単に人を傷つけることのできるものがあることを、忘れてはいけません。

二〇二二夏の決意

吾孀立花中学校 一年 藤本 美緒

今年の夏は、コロナ禍で自粛されていた行事や地域の活動が徐々に再開されました。私が通っていた小学校の近くにある立花団地のお祭りも四年ぶりに開催されました。最後に参加したのは小学校三年生。沢山の屋台、仲良しの友達、ただただ楽しい時間だった思い出があります。

私は今年、団地祭りのお手伝いをさせて頂く機会がありました。一週間前の朝、やぐらやテントを張り、三日前には提灯をつけました。参加していた自治会の方々は、私の祖父母と変わらない年齢の方ばかりでした。炎天下の中、お年寄りにこんな

重たい物を運ばせて大丈夫なの？と勝手に心配していましたが、「手伝いありがとう、疲れてない？無理しないんだよ？」と心配ばかりされました。自治会の方に大変ですねとお声をかけるとみなさん口を揃えて「大変だよ、もうできないよ。でも、他にやる人いないし……。」と言われました。ただ、その後に必ず、「みんなの笑顔や楽しかったと言われるとやめられないんだ。やるしかない」とおっしゃいました。

会場のセッティング、当日の駐輪場整備、ゴミの回収や分別翌朝、ゴミ箱に捨てられていなかったゴミ拾いに至るまで、一つの行事を成功させるためには参加しているだけではわからない事を今回実際にお手伝いをさせて頂き知る事ができました。そして、行事を成功させる大変さと喜び、感謝の気持ちも。

私は、今回お手伝いと私の数少ない地域参加行事と合わせて考え心に決めていた事があります。団地祭りを支えていたのは祖父母世代です。小さい子供がいると参加する事はあっても手伝いをするのは難しいと思います。子供が大きくなると友達と行くという事になり親は付き添わなくなります。すると、地域の催しに足を運ぶ機会が少なくなります。しかし、私達学生世代が少しでも地域活動に関わっていく事で、私達自身も私達の頑張りに応えようと親世代も変わっていくのではないかと思

ます。私達をきっかけに親世代が地域活動に参画し、多世代が共に協力し合える事で地域の文化や知恵・技が継承されていくのではないかと考えました。

地域の一員として何かできる事はないか？誰かを支える事ができないか？を見つげるためにもまずは率先して地域の活動に参加していこうと思います。そしてそこで知り合う方々と一緒に地域活動の輪を広げたいです。また、自分の地域だけでなくこれから知り合っていく沢山の友達の地域活動にも参加し、交流し良いところを学びたいと思います。



中学校 二年生の部

幸せ

両国中学校 二年 島田 香里奈

「こんにちは。」

八月のお盆の日、私は、久々におばあちゃんの家に行った。

私のおばあちゃんは今年の四月、がんだと診断された。そのため、しばらくの間、入院していた。でも私は、そのことを耳にしてもすぐには信じられなかった。あんなに元気だったおばあちゃんがいきなり入院するなんて、思ってもいなかったからでも、しばらくしてやっと状況が分かって、様子を伺うために電話をかけた。

「もしもし。」

おばあちゃんは、少し弱々しい声で電話に出た。私が知っているおばあちゃんとは違う声だった。でも、とても嬉しそうに話しているところは、いつもと変わらなかった。

しばらくしておばあちゃんが退院し、八月のお盆の日に会いに行った。

「いらっしやい。待ってたよ。」

と、優しい声で出迎えてくれた。体は細くなり、体力も少なくなってしまったおばあちゃんだけれど、優しい笑顔と嬉しそうな声は、いつもと変わらなかった。そんなおばあちゃんの様子に、私はちよつとほつとした。

そんなおばあちゃんと話していると、

「暑い中来てくれてありがとう。嬉しいよ。」

と言ってくれた。よくよく考えると、おばあちゃんはいつも嬉しそうにしている。なぜだろうと思ひ、

「おばあちゃんは、どうしていつも嬉しそうなの？」

と聞いてみた。すると、おばあちゃんは少し涙目になりながら答えた。

「何言ってるの。大好きな人、大切な人がそばにいてくれるだけで、嬉しいんだよ。」

この時私は初めて知った。人は、自分にとって大切な人がそばにいてだけで幸せなのだ。無理に何かの力にならなくても、そばで寄り添ってあげるだけで、その人の励みになるのだ。おばあちゃんも同じように、私がそばで寄り添ってあげるだけ

で、幸せを感じている。そんなことを、おばあちゃんから教えてもらったような気がした。

「人という字は、人と人が支え合っていてできている」という言葉のように、人は、自分にとって大切な人と寄り添い合い、幸せを感じてできている。幸せは、人と人が寄り添い合うことで生まれる。私も、限られたこのわずかな時間で、おばあちゃんにとたくさん寄り添い合って、幸せを感じたい。

怪我から学んだ人々の温かさ

豎川中学校 二年 飯島 ソウ カデイージャ

私は今年の四月、バドミントン部で試合中に転倒し、右膝の前十字靭帯を断裂する怪我を負いました。現在夏休み中に手術を受け、入院をしています。私はまだ骨が成長途中だったため、骨に穴を開ける手術をすぐに受けることができませんでした。部活や体育、運動会も全て見学となりました。着替えることもトイレに行くことも不自由でしたし、松葉杖と大きな膝の固定器具は、学校へ行くことさえも不安にさせました。

学校に行く日には、朝が弱い友達が三十分以上も早く待っていてくれました。学校では、クラスメイトが教科書をロッカー

から運んでくれました。部活では顧問の先生ができる限りの練習を考え、付き添い悩みを聞いてくれました。このように、多くの人が私をサポートしてくれたおかげで、私は心強く学校に通うことができました。

それでも手術の後、寝たきりになって激痛に襲われた時、「辛い。」「治ってもみんなとまたバドミントンができるのかな。」と、ネガティブな思考でいっぱいになりました。しまいには、大好きなバドミントンをやりたくないと思うまでに。しかし、部活の仲間がくれた寄せ書きや、フラダンスの仲間がくれたメッセージ動画には心から励まされ、涙があふれました。

「たまには、迷惑かけていいんだよ。全部抱え込む必要なんてないよ。助け合うのが友達、家族ってもんだから。」

友達がくれたこの言葉は、早く復帰をしてみんなと練習がしたいというポジティブな思考を与えてくれました。

入院中には主治医や看護師の方々が、日々のケアや励ましの言葉で私を支えてくれました。ある看護師の方は、困難な状況にある人々を助けることの大切さをつづった手紙をくれました。その福祉に対する看護師の情熱と優しさが私の胸に刺さり、頑張る気持ちにさせてくれました。また、手術のときに、緊張で冷たくなった私の手を握ってくれた看護師の方がいました。そ

の手はとても温かく、心が楽になりました。

これらの出来事は私の将来の夢にも影響を与えてくれました。今私は、医療従事者になり、国際機関で働きたいと思っています。自分がしてもらった看護師の温かさのように、私も、困っている人々に優しく手を差し伸べられる人になりたいです。

どんな困難な状況でも、周囲の人々の支えと優しき、感謝の心があれば苦しいことも乗り越えられ、成長できる——今回、そのことを学びました。私はこれからも、助け合う気持ちを忘れず周りの人々を大切に、様々なことに挑戦していきたいと思っています。

祖母への花束

寺島中学校 二年 内海 克博

今年の春、東京の祖母が死んでしまった。肺がんだった。

私がまだ小さい頃、祖母は働く両親の代わりによく看病してくれた。私が熱を出すと、電車とバスを乗り継いで、一時間三十分かけて自宅に来てくれていた。時折、腰が痛そうに見えても、私の前ではいつも笑顔だった。夏休みやお正月に祖母の家に遊びに行くと、祖母は一番早く起きて、食事の準備や洗濯

をしたり、私が散らかした部屋を片付けたり、元気に動いていた。だから、去年の秋に祖母が病氣と聞いても、すぐ良くなると思っていた。私はその病氣のことをあまり知らなかったし、入院したとき「祖母のことだから、すぐに退院するだろう」と思っていた。

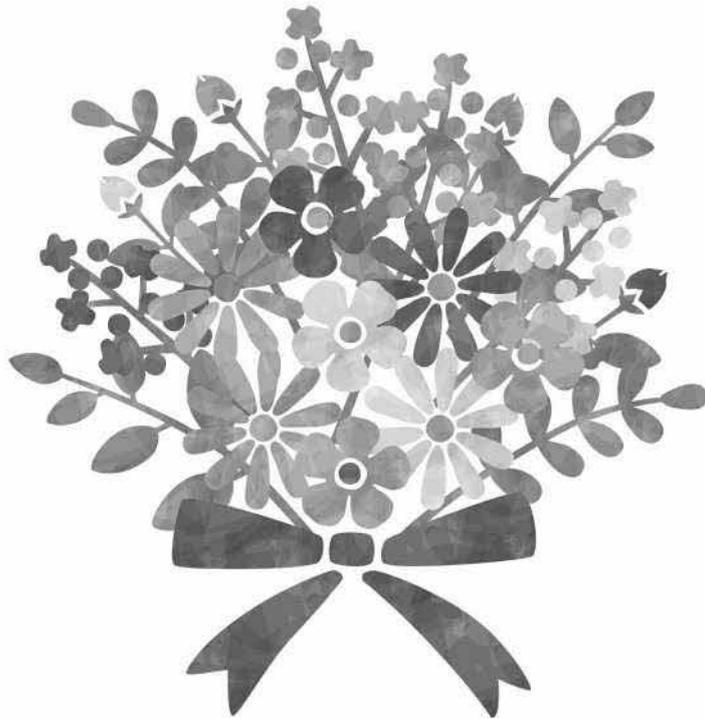
冬になって、母が「おばあちゃん死んじゃうかもしれない」と悲しそうにしていたが、私は祖母がまだ元気になると思っていた。お見舞いに行ったとき、話しかけてもわからなくなった祖母を見て「うそでしょ！がんばって」と思っていた。今まで家族が死んだことがなかったから信じられなかった。現実のこととして受け止められなかったのだと思う。

そして、春に祖母のお葬式があった。祖母のために花束と和菓子の買いものを頼まれたときも本当に死んでしまったのかな、と思ったし、白い装束を着た祖母の体を拭いていても、ただただ眠っているだけに見えた。ひつぎの中に入れる小さい手紙を家族みんなで書いた。私はこの後どうしたらいいのかと思いつながら「いままでずっと優しくしてくれてありがとうございました。」と書いた。

火葬されて骨だけになった祖母を見て、本当に亡くなってしまったのだなと実感した。小さい箱に入った祖母を運ぶ役割を

やりたいと申し出た。今まで自分が世話になったお礼をしたかったからだ。祖母を抱えてみたら、想像よりも重かった。まだみんなと離れたくないという祖母の気持ちがそこにあるような気がした。

人が死ぬということは、今まで考えないようにしていた。ゲームのプレイヤーが死んでもなんとも思わないが、リアルな死は誰かが傷つくことであり、その人に一生会えないことでも寂しい。祖母の死後私の心にある何かがなくなってしまうような感じだ。それでも、今を生きている自分はいつも通りの日常を、家族とけんかしたり助け合ったりして過ごしたい。私が自然と笑みがこぼれる毎日を送ることで、祖母を安心させたいと思う。これから毎回のお墓参には「今まで世話をしてくれてありがとう」と心で話しかけて、花を持っていくつもりだ。



出会ってくれてありがとう

本所中学校 三年 岸上 茉奈

皆さんは、誰かと出会ったとき「嬉しい」より先に「寂しい」という感情が生まれた経験はないだろうか。私はある。なぜなら、出会ってしまえばいつか必ず別れがくるからだ。私は、新たに出会ったり久しぶりに再会したりしたとき、会った瞬間は楽しくても、この時間がずっと続くわけではないと思うと悲しくなってしまうていた。だから、新たな環境で新たな友達を作るのが少し怖かった。

しかし、このような私の考えはある友達の一言で変わった。「別れるってことは出会えたってこと。こんな素晴らしい人と出会えたなんてすごくない？ 出会ってくれて本当にありがとう。」

彼女はたくさん引越しをしていて、私よりもずっとお別れをしなくてはいけない場面が多かったはずだ。だけど、「別れ」という決して楽しくはないときでも、相手への感謝の気持ちを

忘れていなかった。彼女からこの言葉を聞いたとき、今までの私はなんて自分勝手だったのだろうと恥ずかしくなった。別れが辛いのは互いに同じ。そんなとき、寂しさより感謝の気持ちをしっかりと伝えることができれば、少しでもお互いが幸せになれるのではないかと考えることができた。

私は今年、四年ぶりに父の実家である徳島に帰省した。久しぶりに会って元気な姿を見せて、みんなに元気になってもらおうと思っていた。実際、元気をもらったのは私の方だった。祖母や従姉妹、幼少から続いていた阿波踊りの仲間など、誰かに会うたびに「会いに来てくれてありがとう」と声をかけてもらったからだ。帰省を終えて東京に戻ってくるときはたしかに寂しくなったけれど、みんなからももらったたくさんの「ありがとう」のおかげで、私も「四年の間、私を忘れないで待っていてくれてありがとう」という感謝の気持ちが先に出た。私はこのとき、たとえ遠くに行ってしまうても、すぐには会えなくても、心の距離はとても近くに感じてすごく幸せだった。「寂しい」「辛い」であふれていた別れが最高の思い出となったのだ。この日から、私は「出会い」というものが怖くなくなった。

感謝の言葉は人と人との心の距離を近づけてくれる素晴らしいものだと思つた。

いつ出合い、いつ別れるかなんて分からない。でも、誰かと心を通じ合わせ、少しでも後悔のないように、一緒にいる時間が少しでも幸せになるように、たくさんの連絡ツールがある今の世の中であっても、直接顔を合わせて感謝の気持ちを伝えるべきだと私は思う。だから、今は学校の友達やサッカーの仲間など、会う人全員に伝えられるときに直接感謝の気持ちを伝えるようにしている。私はたぶんこれからもたくさんの人と出会うだろう。そのときは必ず相手に伝えたい。

「出会ってくれてありがとう。」

支えてもらっていること

寺島中学校 三年 **松村 柚希**

私の人生のモットーは、身近な人を大切にすることだ。

「じゃあ、産まなきゃよかったじゃん。」気がついたらそう言葉が口から出ていた。受験生としての自覚が足りていないことを指摘され、私は反抗してしまった。友達との遊びを何度も断つたり、家族での団らんにも入らないで一生懸命勉強をして

きたつもりだったからだ。それでも母は自覚が足りない、疲れるからもう言わせないでくれ、という。疲れるのはこっちだよ、勝手に産んだくせになんでそんなこと言うの。そう思いが込み上げてきた私は産まなければよかったと言ってしまった。その言葉で私は母を大きく傷つけてしまい、私は今まで見たこともないくらい泣いていた。その数日後だった。母が手術のために入院した。母は子宮の病気になっていて、手術をするのだという。入院当日の朝、私は母を傷付けてしまったとわかっていても素直に謝ることができず、結局母と私は最後まで何も話せなかった。母がいない家はいつも通りにはならなかった。父が母の病院へ見舞いに行きながら私たちの世話をしてくれていたものの、塾で夜遅く帰ってくる私の夕飯の洗い物や洗濯物などではできないため、できるだけ自分たちでやるようにした。ああ、こんなに大変だったっけ。私は母がいなくなって初めて母の存在の大きさを、いつも家事をしていてありがたみを感じた。

学校では合唱祭の自由曲決めをした。その時に聞いた曲の一つに「決意」という曲がある。その曲は先を生きている祖父や祖母、あるいは両親についての曲で、「あなたの背中に人としてあるべき姿を知る。」という歌詞が入っていた。決しても

すごく誠実だったり頭が良かったりする、すごい人というわけではないけれど、私の中で何でもできて憧れの人である母がこの曲の歌詞に重なり、思わず涙がこぼれてきた。その時に初めて私は母をもっと大事にするべきだったと思った。一週間後、発熱などは少しあったものの、予定通りに母が帰ってきた。その時に私は母に産まなければ良かった、と言ってしまったことを謝った。とても気恥ずかしかったけれど、謝れて良かったと思う。

人は誰しも周りの人に支えてもらって生きているが、そのことを忘れがちである。今回の体験を通して私は周りの人が自分に支えてくれていることを、あたり前のように錯覚していることに気づいた。母が自分のお腹を痛めて命懸けで産んでくれて今の私があるということを忘れ、とても身勝手なことを言ってしまったと思う。私は反抗期だということもあって両親に対して反抗したり不満を持つたりすることもあるけれど、これからは支えてもらっていることに感謝し、周りの人を大切にしていきたい。

「僕の日常」

桜堤中学校 三年 結城 大雅

ある日のこと。僕の祖母が高熱を出した。祖母は持病を患っているため、熱が出たと言われとても心配になった。いつもなら祖母は4日間あれば風邪や熱は治っていたのだが、今回の風邪は熱が下がってもだるさが中々引かなかった。1〜2週間くらいが経ち、ようやく風邪が治り、落ち着いた。そう思っていた。風邪が治り少し経ったある日。僕の祖母は腎臓が悪いので、病院に検査を受けに行った。CT検査という、レントゲンのような検査を受けた。何事もなく腎臓の治療をしていくだろうと思っていた。だがCT検査の結果「黒い影が見える、もしかしたらがんかもしれない」という結果だった。僕は「がん」というその2文字の言葉を聞いたとき、不安で心がいっぱいになった。少し時間が経ち、祖母はがんの検査をした。結果、「大腸がん」という病気になったのだ。僕の祖母は「ステージ2」と診断された。ステージ2がどんな状況なのか簡単に言うと、筋肉の層という所を越えて周囲に広がっている状況のことを言う。1秒でも早く治らないかと思っていた。祖母は病院に入院し、闘病生活が始まった。

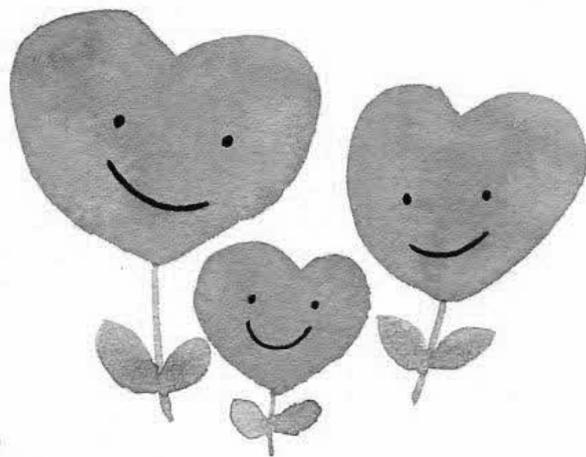
約1週間が経ち、手術日が決まった。僕はほぼ毎日電話をしていた。親しい友達にも話した。手術日が近づくにつれ、緊張感が増していった。学校の授業も集中できなくなるくらい、不安と心配で頭がいっぱいだった。でも学校ではそういった顔を見せたくなかったので隠していた。小さな頃からおもちゃやゲームを買ってくれたり、美味しいご飯を作ってくれたりお世話になりっぱなしだったので大人になって恩返ししようと思心に誓っていた。でも恩返しができなかつたらどう謝ればいいのかわからなかった。

手術当日。朝起きて、学校に行く準備をした。学校に行く10分前に祖母に電話をした。祖母は元気な声で「頑張ってくる!」と言ってきた。涙が出そうになったがこらえて、僕も「頑張れ!」と言って電話を切り学校に登校した。いつも以上に授業に集中できない。教室の時計の秒針1秒1秒が重く、鋭い刃物で刺されたような痛みが胸に走った。

その日は何もかもがどうでもよく思えた。手術開始時刻は朝の9時だったため家に帰れば結果が待っている。その時僕は家に帰るのが死刑台に立つくらい嫌だった。いつも10分くらいで帰るのにその日は30分かかった。玄関に着き気持ちを整えてリビングに向かい母に電話した。結果は成功、僕は涙を流しガッ

ツポーズをした。

手術後に会った時、祖母はとても痩せていた。でも元気そうだった。この時僕は思った。何気ない日常生活を送れていることが人生で一番幸せなんだと。これから高校受験や就職などの大きな壁があるけれど、家族や友達と共に乗り越えていこうと強く思った。



佳
作
一
覽

【小学校の部】

◎小学校1年生の部

だいすきなかぞく	緑小学校	村上	未桜
ぼくとおかあさんとじてんしゃ	二葉小学校	齊藤	暖人
みんなだいすき	錦糸小学校	黒瀬	凜菜
だいすきなかぞく	中和小学校	矢嶋蓮太郎	
ぼくのおねえちゃん	言問小学校	秦	蓮仁
おじいちゃんのおうち	小梅小学校	川崎	凜乃
みんなをえがおに	柳島小学校	伊藤すみれ	
ぼくのおとうと	業平小学校	鈴木	柊吾
ドッジボールチーム	両国小学校	井上さくら	
だいじなかぞく	横川小学校	石塚	愛唯
はじめてのキャンプ	菊川小学校	吉田	藍
ちょうないかいのみなさんに	曳舟小学校	高橋	沙帆
じどうかんで	中川小学校	若宮	風沙
ふわふわのやさしいきもち	東吾孺小学校	小花	柚璃
ぼくといもうと	八広小学校	嶋本	直
きらいになっちゃったのかな	隅田小学校	葉山ほまれ	

◎小学校2年生の部

おかえり	緑小学校	向阪	健
ぼくの妹	外手小学校	原島	武琉
かめ四の太こキッズ	二葉小学校	木村美沙生	
ぼくのすきなお母さん	中和小学校	鈴木	歩
わたしのおねえちゃん	言問小学校	橋本	実結
みんなでおんせん	小梅小学校	本郷	鈴音
ともだちにかんしゃ	柳島小学校	小林	愛理
ナイスシュート	業平小学校	津江	咲良
わたしのおじいちゃん	横川小学校	後藤	光彩
太こで本ばん、うまくできるかな	菊川小学校	岡崎	朱里
学校たんけん	第三吾孺小学校	鎌田	小陽
ラピのおかげで	第四吾孺小学校	中村	美晴
となりのおばあちゃん	第一寺島小学校	岩脇	寿弥
近じよのごあいさつ	第二寺島小学校	上林	大耀
いもうとのおせわ	曳舟小学校	荻原	悠里
いっぱいのおせわ	東吾孺小学校	森田	里乃
あいさつについて	八広小学校	石本	公飛
ぼくのかわいい弟	隅田小学校	宮崎	勇成
ぼくのかわいい弟	立花吾孺の森小学校	加畑真那斗	

◎小学校3年生の部

会いたいおじいちゃん	緑小学校	春山 雄一
しゅう中するということ	外手小学校	渡瀬 逢生
町内のたのしさ	二葉小学校	榎本 佳歩
友達とつながる	錦糸小学校	矢野 朱莉
わたしの大好きなまし子さん	言問小学校	田崎 未子
大切な家族	小梅小学校	長野 凜
ありがとう	柳島小学校	木村 実鼓
みんなできょう力	両国小学校	千々岩陽菜
助けてもらったこと	菊川小学校	河合倫太郎
いつもとちがう夏休み	第四吾孀小学校	鶴見 圭梧
サッカーが教えてくれた事	第一寺島小学校	高橋 凱
おばあちゃんは、あそび名人	第二寺島小学校	権平さつき
バレエのれいぎ正しさ	曳舟小学校	國井 美鈴
弟になれる一日	中川小学校	北島 朋樹
ぼくの弟	東吾孀小学校	金山 颯良
大切な友だち	押上小学校	秋山ひなた
わたしの親せき	八広小学校	八巻 花楓
バレエでの成長	隅田小学校	石川 葉椰
人のために動くこと	立花吾孀の森小学校	青木源太郎

◎小学校4年生の部

礼ぎの大切さ	外手小学校	橋本 樹
ぼくの応えん団	二葉小学校	小野 遥琉
五百キロメートルのきずな	錦糸小学校	杉生こいこ
大切な家族	言問小学校	畠山 糸
友達のつくり方	小梅小学校	榊 彩未
人と人のつながりとは	業平小学校	須藤 香音
助け合いの大切さ	両国小学校	小柳 香都
「お姉さんは大変」	横川小学校	東 さくら
人と人とのふれあいについて	菊川小学校	岡崎 真実
家族への感謝	第四吾孀小学校	後藤 龍志
まほうのアイテム	第一寺島小学校	脇本 陽野
あいさつについて	第二寺島小学校	土屋 仁成
相手の気持ち	第二寺島小学校	根本 蓮大
勇気をだして人のために	曳舟小学校	平沼 優花
九十才のひいおばあちゃん	中川小学校	板垣 舞
九六二グラムで生まれた私	押上小学校	猪瀬陽奈子
おばあちゃんから学んでいる事	八広小学校	山口 千遥
友達との関わり	隅田小学校	天野 心結
剣道が好きになった	立花吾孀の森小学校	来住純之介

◎小学校5年生の部

黒帯への挑戦	外手小学校	中村 駿介
バスケットを支えてくれている人たち	二葉小学校	河崎 皓貴
ぼくのSDGs	錦糸小学校	木野 佑哉
人生で最高の恩返しへ	中和小学校	石橋 翼
居ないけどあるもの	言問小学校	松居 志美
友達づくりのきっかけ	小梅小学校	安川 颯音
つなげ！信らいのパス！	柳島小学校	田中 陽介
私の大好きな先生	業平小学校	内川 來愛
ぼくの町と外国人	横川小学校	木村 綾一
アーティストになる第一歩	第三吾嬭小学校	伊東 ココ
「協力することの大切さ」	第一寺島小学校	高橋 亜実
全力野球少年	第二寺島小学校	外山 颯悟
町内会の活動で考えたこと	第三寺島小学校	中元 咲夏
友達って、いいもの	曳舟小学校	香山 月音
スヒョンとテヒョンとの夏	中川小学校	西村 空
サッカーでの人とのふれ合い	東吾嬭小学校	宮澤 豪
初めてのホームステイ	押上小学校	奥山 遙人
人とつながるラジオ体操	八広小学校	田中ひより
クラスのみんなと笑顔	隅田小学校	村山 花

◎小学校6年生の部

感謝の気持ちをわすれない	外手小学校	川田 紘希
「親切」のその先には	二葉小学校	宮本 佳音
早朝からラジオ体操	錦糸小学校	小山 志乃
人の優しさ	中和小学校	有賀 大騎
助け合う心	言問小学校	若槻 咲知
人と人のつながり	小梅小学校	大宮 莉世
人とのふれあいとは	業平小学校	村岡 凜
人と人とのふれあい	両国小学校	市川ひまり
友達の大切さ	菊川小学校	白石 偉斗
ミニバス	第三吾嬭小学校	山本 愛佳
コミュニケーションを高めよう!!	第一寺島小学校	岡安あゆむ
出逢えた事が何かの縁	第二寺島小学校	飛田 愛生
大切な家族	第三寺島小学校	中谷 美結
助け合いの一步	曳舟小学校	西脇 沙良
いい事をしたら…	中川小学校	新里瀬里彩
人を大切に思う	東吾嬭小学校	池田由珠絆
思いやりで心を明るく!!	押上小学校	原田 芽依
自分から	隅田小学校	高橋希ノ葉
あいさつの大切さ	立花吾嬭の森小学校	藁谷 奏太

【中学校の部】

◎中学校1年生の部

四センチの傷跡

墨田中学校 城井 花音

「ふれあい」は世界平和への第一歩

本所中学校 久保 慶太

外国人とのふれあい方

両国中学校 西村 隆馬

世代をこえた人とのふれあい

豎川中学校 佐藤 由庵

親しい人との関わり

錦糸中学校 下重妃奈乃

「祖母のいない夏休み」

桜堤中学校 菅家 太一

◎中学校3年生の部

いつもの約束

墨田中学校 川部 斗真

反抗できない私の母

両国中学校 田島 悠華

ボランティアでの気づき

錦糸中学校 高石 紅羽

大切な人

吾孀第二中学校 石山 美緒

支え合うことで得られる物

文花中学校 田村京太郎

当たり前は当たり前じゃない

吾孀立花中学校 岩野 琴葉

◎中学校2年生の部

「直接じゃないと伝わらない気持ち」

墨田中学校 坂下心々菜

お母さんの大変さ

錦糸中学校 谷口 怜来

「仲間」との絆

吾孀第二中学校 山口 流衣

私の弟

文花中学校 高羅 礼紗

「部活の大切さ」

桜堤中学校 北村 詩音

人との関わり

吾孀立花中学校 大藤実乃里

「やさしいきもちでいっぱいのせかいに」

伝統ある「青少年健全育成作文コンクール」に、今年も数多くの作品が寄せられました。掲載された作品はもちろんのこと、惜しくも選外となった作品も、全て心温まる子どもたちの思いがあふれています。ある審査員の方が「墨田の未来は明るいね。こんなに優しい御家族、地域の方に囲まれている子どもたちが、その優しさに気付いているから。」と放った言葉が忘れられません。このコンクールには、児童・生徒が日常生活の中から、地域の皆さんとのふれあいや家族との絆、友情などに思いを寄せ、さらには広く国際社会にも目を向けた作文が出品されました。優しさに気付ける子どもたちに大いに拍手を送りたいと思います。

さて、最優秀賞を受賞した作品について紹介とともに講評させていただきます。小学1年生の「やさしいきもちでいっぱい」では、難病と闘ういとこの交流や彼を取り巻く人々から、自分への優しさに気付き、自分も仲間入りしようとして力強く宣言しています。「ウクライナレストラン」では2年生でありながら遠く戦地の人々に心を寄せ、平和を願うとともに自分にできることは何かと考えています。国際情勢、戦争と平和という大きな問題を自分の身近な体験から真剣に考えることができました。3年生の「大切な宝ばこ」では、お父様の死というくつがえせない悲しみに向き合っています。父が生きていたら手をつないで歩きたい、などと想像しながら、悲しむのではなく楽しい気持ちになると、心の宝箱を大切にしています。お父様の強さと優しさをしっかりと受け継いでいます。4年生の「じいじとつないだ手」は遠くに住んでいるおじいさまとの交流を通して、感謝や優しさ、思いやりが育っています。そしてつないだ手のぬくもりから、優しさと元氣、頑張る勇気を感じ、言葉だけでは伝えない思いの伝え方を発見しています。読んでいて優しい気持ちになります。5年生の「ぼくの大切な髪」では、ヘアドネーションのことだけでなく、人が差別をする心理にまで言及して様々な問題に一石を投ずる内容でした。自分の強い意志で行動していることが周りの偏見を吹き飛ばしています。その優しさに裏付けられた行動力は大切です。6年生の「登下校を豊かに」は引越しをきっかけに、登下校を見守ってくださる方との交流が生まれたことを書いています。相手を思いやる気持ちも芽生え、挨拶の大切さも気付きました。見守っていただいたその方にも是非読んでいただきたいです。中学1年生の「繋がる心遣い」では家族旅行からの様々な洞察を書いています。清掃からおもてなし、そして日本文化にまで主体的に考えを深めています。「当たり前前に感謝」という言葉には相手への心遣いがすでに表れています。そこに気づかせてくれた御家族のすばらしさも同時に感じました。中学2年生は「児童館で教わった大切な事」として、職場体験においてどれだけ充実した時間を過ごしたかを発表してくれました。子どもたちから親しんでいた児童館だと思えますが、自分の乳幼児期に想いを馳せ、家族からの「恩返し」という言葉に背中を押してもらい、さらに一歩前へ進もうとしてすばらしいです。中学3年生の作品は、現代ならではの視点で、人と人とのふれあいを論じています。「機械化とコミュニケーション」と題し、ロボットや機械、AIのことに触れて様々な人と人との心のふれあいについて考えると同時に自分の夢を高らかに言葉にしている点がとても3年生らしいです。全編を通して、子どもたちから家族への安心感や信頼、地域の方への感謝や尊敬などが共通しています。学校を一步外に出て地域の中の子どもたちとなった時に学校とは別の見守りが墨田区にはあります。このような優しさに気付いている子どもたちだからこそ、「やさしいきもちでいっぱい」のせかい」を築いてくれることでしょう。青少年健全育成活動にご尽力いただいている全ての皆様方に心から感謝申し上げます。講評いたします。

墨田区立中学校教育研究会国語部長

墨田区立吾嬬第二中学校長 駒田 るみ子

令和五年度青少年健全育成作文コンクール審査員一覽

(敬称略)

横井新一	豎中地区青少年育成委員会委員長	小学1年
明石由美	寺中地区青少年育成委員会	小学1年
海野由香	墨田区青少年委員協議会	小学1年
小林厚子	錦中地区青少年育成委員会委員長	小学2年
小野俊一	墨田区青少年委員協議会会長	小学2年
杉崎真嗣	桜堤中地区青少年育成委員会	小学2年
吉澤利雄	吾孀立花中地区青少年育成委員会委員長	小学3年
小武三博	墨田区立小学校PTA協議会会長	小学3年
黒田佐恵子	本中地区青少年育成委員会	小学3年
山口仁美	両中地区青少年育成委員会委員長	小学4年
小澤裕二	墨田区少年団体連合会会長	小学4年
藤田章弘	吾孀二中地区青少年育成委員会	小学4年
安藤玲子	本中地区青少年育成委員会委員長	小学5年
坂井正廣	吾孀二中地区青少年育成委員会委員長	小学5年

小林正明	墨中地区青少年育成委員会	小学5年
市川清	文花中地区青少年育成委員会委員長	小学6年
畠山恵美子	錦中地区青少年育成委員会	小学6年
清水雅也	墨田区立第四吾孀小学校校長	小学6年
堀口義晃	寺中地区青少年育成委員会委員長	中学1年
大平千江子	豎中地区青少年育成委員会	中学1年
宮野律子	吾孀立花中地区青少年育成委員会	中学1年
西村紀子	墨中地区青少年育成委員会委員長	中学2年
泉和典	墨田区立中学校PTA連合会会長	中学2年
中村恵	文花中地区青少年育成委員会	中学2年
長谷川豊	桜堤中地区青少年育成委員会委員長	中学3年
櫻井陽子	両中地区青少年育成委員会	中学3年
駒田るみ子	墨田区立吾孀第二中学校校長	中学3年

令和 6 年 3 月

墨田区教育委員会事務局
地域教育支援課地域教育支援担当

〒130-8640 墨田区吾妻橋 1-23-20
電話 03 (5608) 6503



ひと、つながる。
墨田区